



図209 B区遺構外出土遺物(6)

側縁の湾曲が弱いⅡ類。Ⅰ類には菱形のものが多い。図207-8は実測図の上下が逆だろうが、上が茎部のように細く作られている。図207-16～22は破損のⅢ類だが、図206-16・17は大きさからみて石槍に含めるべきものである。

石篋(図208-1～11)：11点図示した。図208-6は短冊形直刃のⅠa類、図208-1・2・4・8・11が短冊形円刃のⅠb類、図208-3・9を撥形直刃のⅡa類、図208-5・7・9を撥形円刃のⅡb類とした。平面形態および刃部形状を区分する上で悩むものが多い。図208-9の基部は尖頭状に突出しており摩耗している、再調整され錐としても使用されたものと思われる。

石匙(図209-1～9)：9点図示した。すべて縦形のⅠ類であるが、図209-9は両面周縁調整で形状的にもスクレイパーとした方が妥当か。図209-7・8は腹面の周縁調整が主体である。

楔形石器(図209-10)：1点図示した。四辺形に成形され、上下両端に敲打による剥離が見られる。

石錐(図209-11～16)：6点図示した。図209-11～15は剥片の両側縁を両面調整し一端部に錐部を作り出したもので、片方の端が保持する摘み部になるとと思われるものでⅡ類とした。図209-16は鋭利な一端部に簡易な調整を施したⅢ類。

異形石器(図209-17・18)：すべて図示した。図209-17は摘みの大きい石匙様であるが、両面調整されていることと、湾曲した端部の形状が他の異形石器に近いため含めた。前述の図209-7～9の石匙も異形石器様である。図209-18は両面調整で三日月状に作られている。中央部が窪んでおり、摘み状の突起が破損している可能性がある

スクレイパー類(図210～図211-1～8)：24点図示した。図210-9・10はⅠa類、背面調整が主体で腹面側の調整は部分的である。図210-10の腹面側の調整は打瘤の厚さを取ったものと思われる。図210-8・12はⅠb類、Ⅰa類と同じく腹面側の調整は部分的である。図210-2・4～7・11はⅠc類、図210-11は剥片の上下に挟り調整が施されている。図210-1・3はⅠd類、調整剥離がほぼ全面を覆うもので、小型石槍の未製品の可能性がある。図211-5はⅡa類、背面の一側縁に細かな剥離調整が施されている。図211-1・2・4・7・8はⅡb類、図211-7の腹面縁辺には光沢が認められる。図210-13～16はⅡc類、図210-13の剥片端部には急角度調整が施されている。図210-14には両側縁調整のほかに、腹面側から鋭利なもので打ち抜いた様な剥離が施されている。図211-3・6はⅢc類、図211-3は小型で短冊形に成形されている。

両面調整石器(図211-9～11・図213-1～4)：15点図示した。形状的に、木葉状(図211-9・10・図212-5・図213-2)のもの、槍先状(図212-6・8・図213-1・3・4)のもの、方形(短冊形)状(図211-11・図212-1～4・7)のものがある。図211-9・11・図212-1・4・8・図213-2は側縁の細かな調整から使用された可能性がありⅠ類とした。図211-10・図212-2・3・5～7・図213-1・3・4は製作途中に破損したものと捉えⅡ類としたが、図212-2・図213-3は石核の可能性もある。

石核(図214～図219)：24点図示した。図214-2～5・図215・図216-1～3・図217-2はⅢ類の原礫面を打面とする石核とした。偏平な礫のほか厚さのある円礫も用いられている。図214-2～4は両面調整石器のⅢ類としてもよいだろう。図215-2・図216-1は原礫のもつ平坦な面から剥離されている。図214-5・図215-4・図216-2・3は片面側が集中して剥離されている。図217-2は小円礫が素材となっている。図214-1・図216-4・図217-1・3～5・図218-1・2・4・5はⅡ類。礫の端部や稜線部から得た剥片および分割した礫を素材としている。図214-1は両側縁の細かな剥離から、これ自体で機能した可能性もある。図216-4・図217-1は分割した礫素材の剥離面と剥離面の周縁から剥片を剥ぎ取っている。図218-1は礫の表皮側から周縁を剥離し、円錐状形を呈している。図218-3・6はⅠ類。打面を転移して多方向から剥離しているもので、立方形状の残核となっている。図218-6は



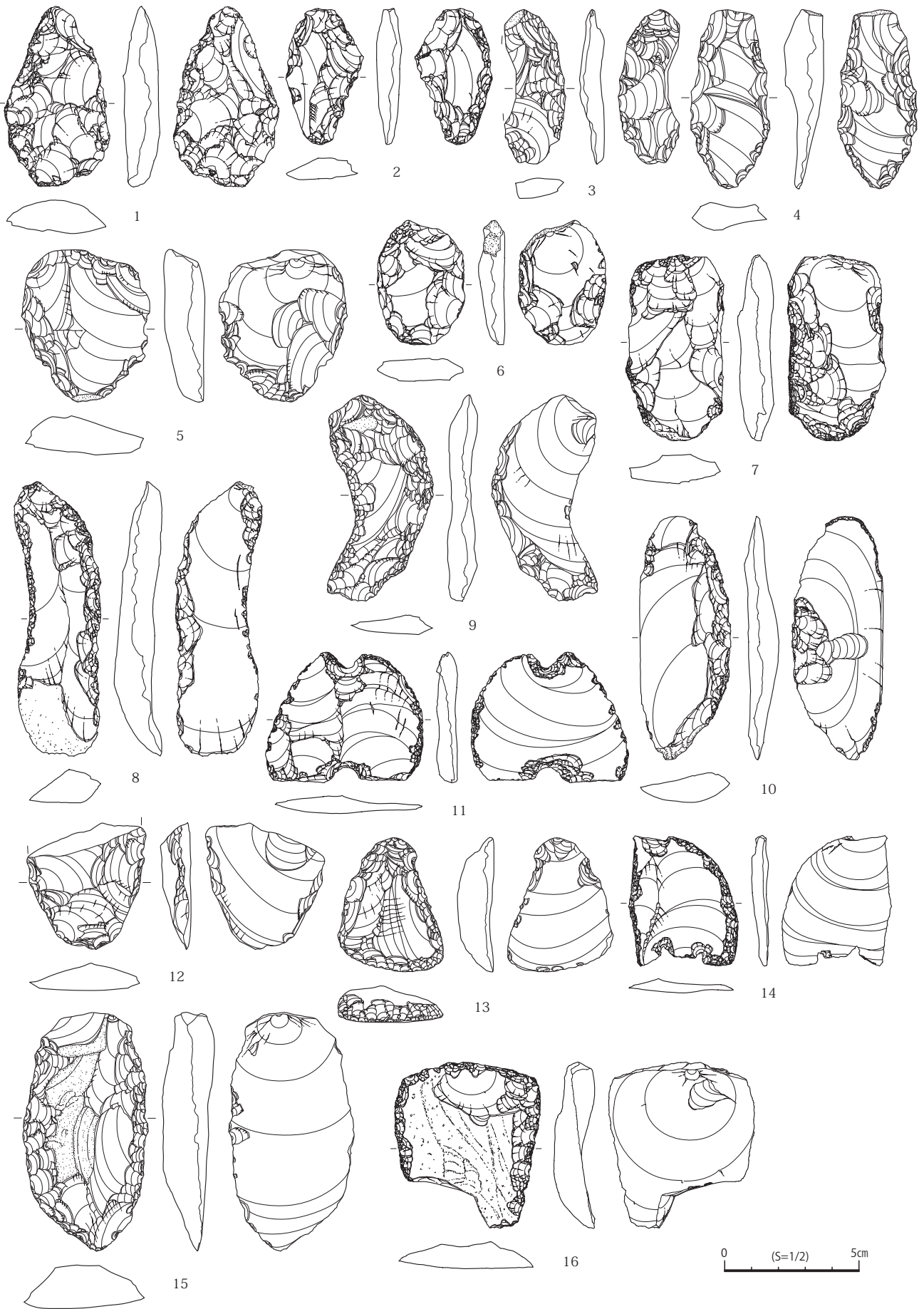


図210 B区遺構外出土遺物(7)

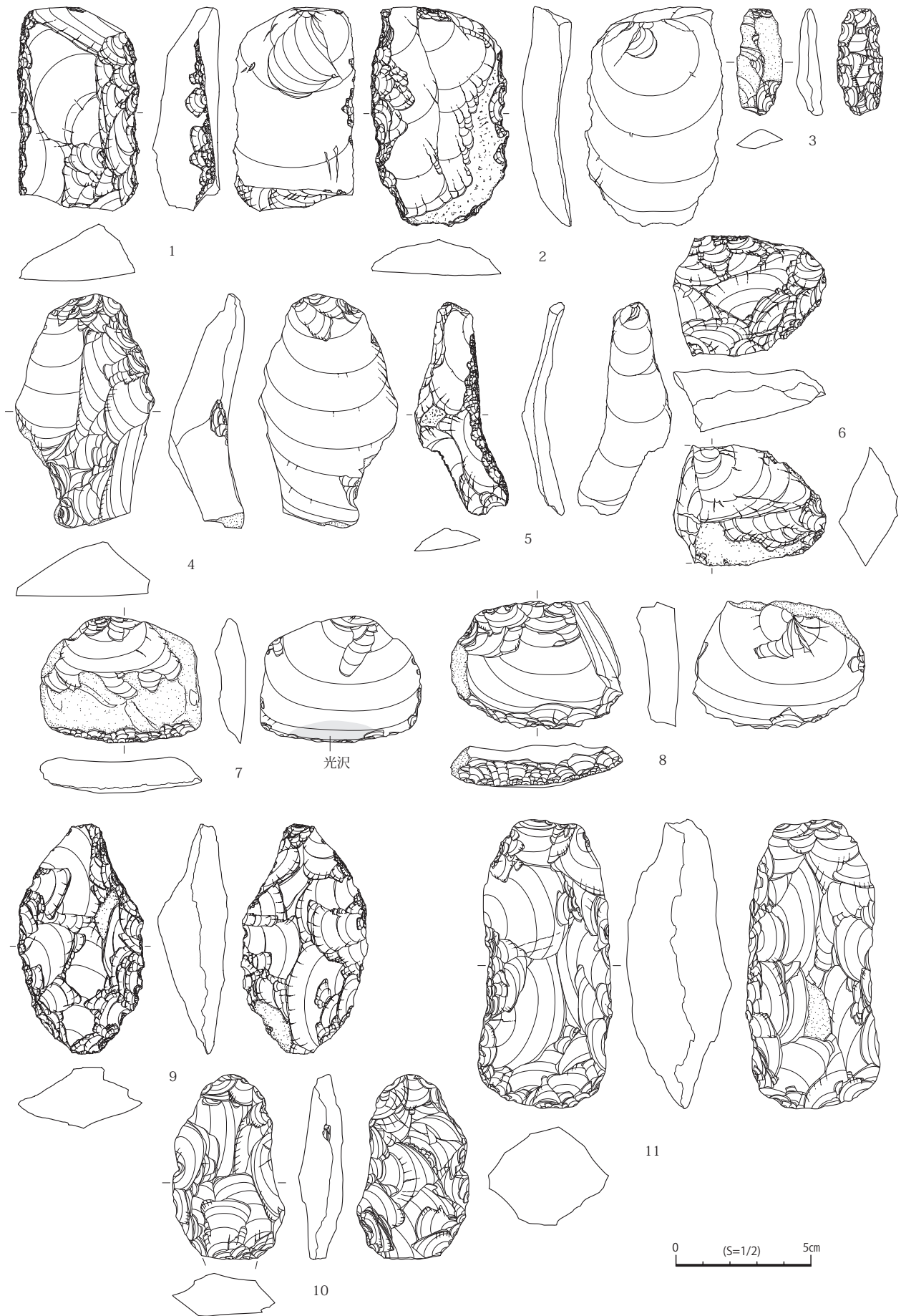


图211 B区遺構外出土遺物(8)

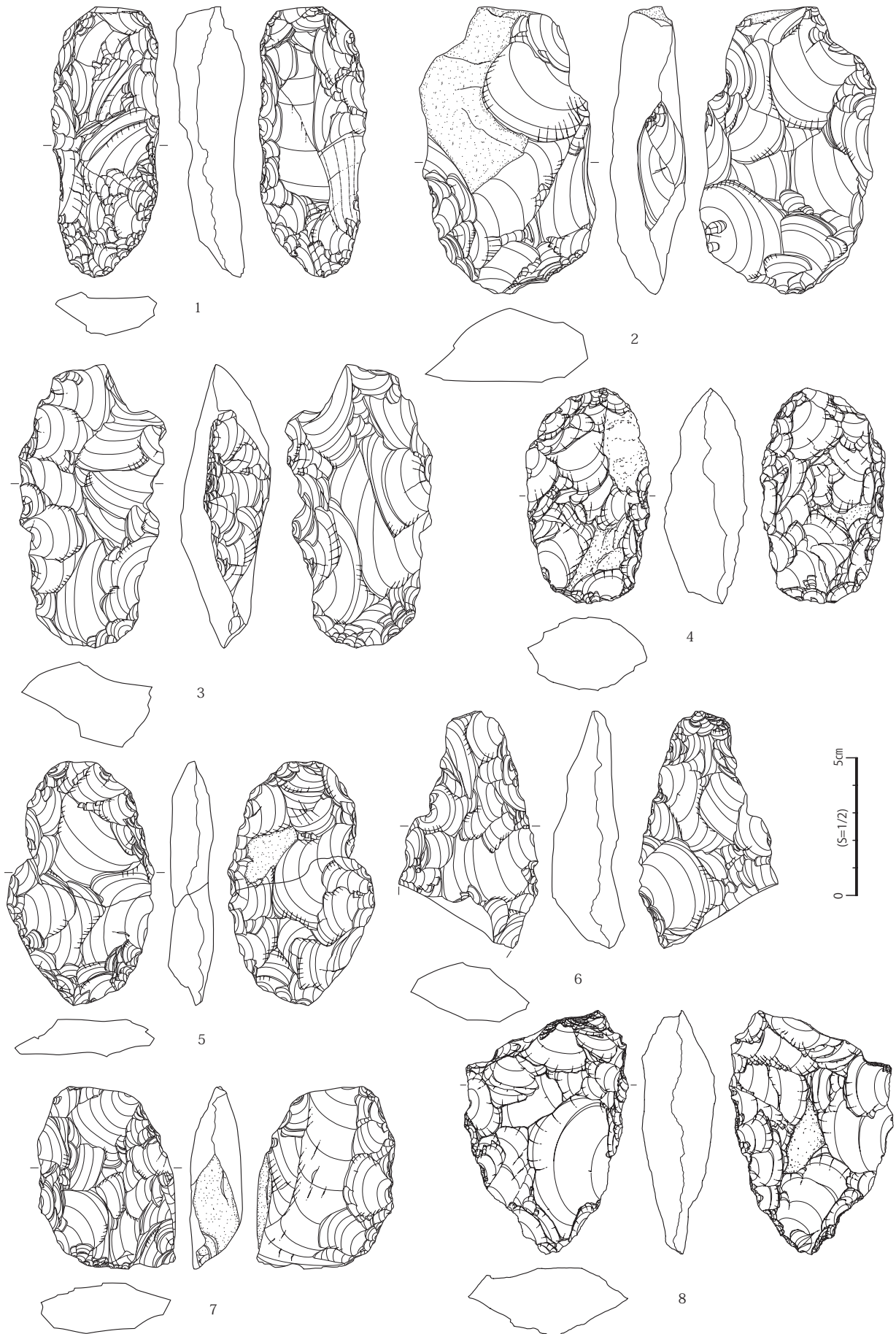


图212 B区遺構外出土遺物(9)



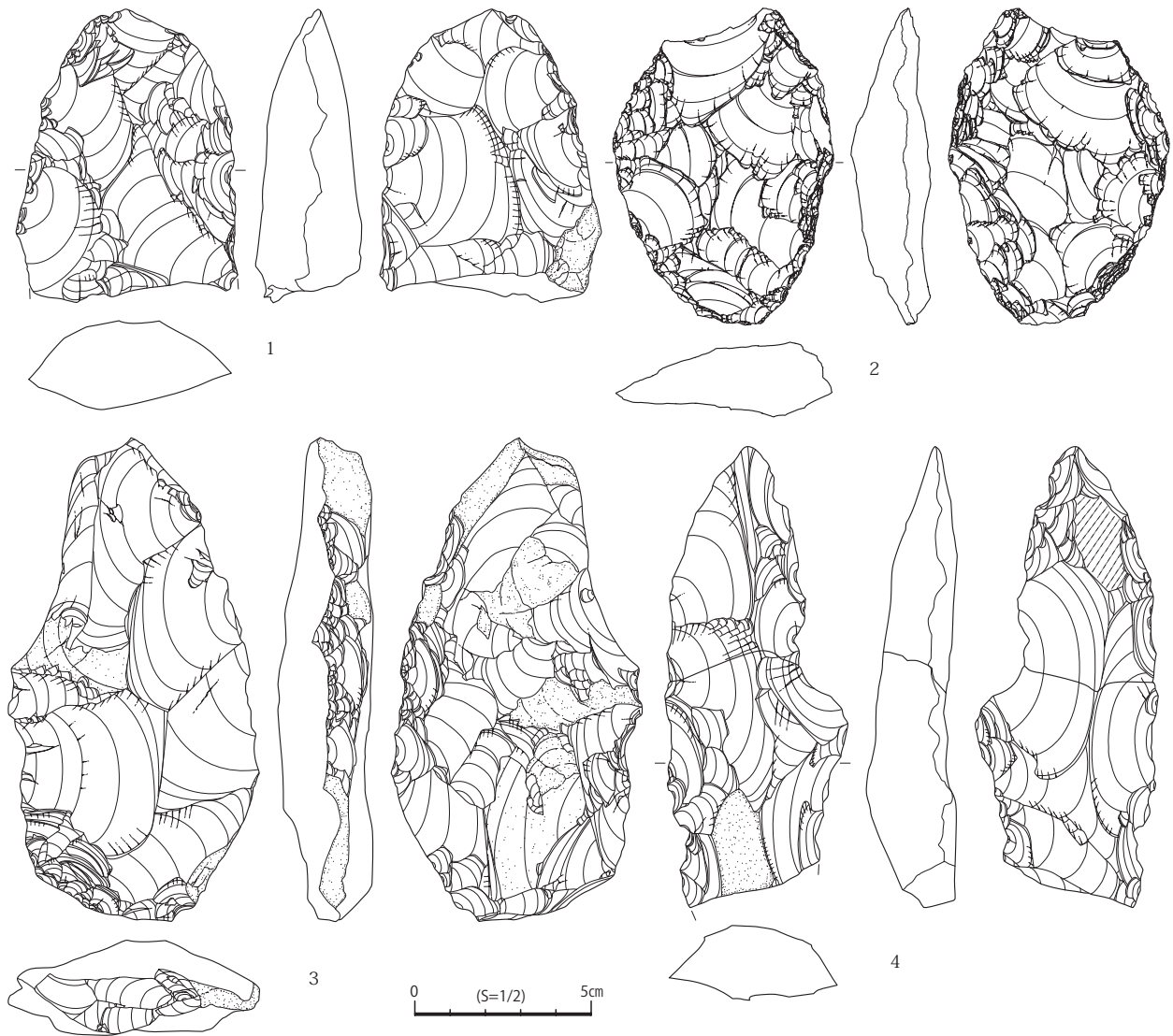


図213 B区遺構外出土遺物(10)

原礫面を残す面が多く、分割礫ないしは剥片素材であったものと思われる。

接合資料(図219・図220):1次調査で出土した資料で、同一グリッドからの出土と思われるが出土状況は不明である。2点の両面調整石器(図219-2・3)と8点の剥片(図219-4～11)が接合している。前担当者が、実測図作成と本資料の観察所見を株式会社アルカに委託しており、以下にその所見を転記する。文責は株式会社アルカの高橋哲氏、転記のため遺物番号を変更、写真は削除。

『珪質頁岩の接合資料である。総数10点の石器が接合している。図面上側からの剥離で、図219-12(図219-11+図219-2)が剥離される。図219-2にみられる剥離開始部の特徴はコーンタイプであり、ハードハンマーの直接打撃で剥離されたと思われる。これと同規模の剥離面が球心状に接合資料の正面にみられる。図219-11と図219-2の接合した図219-12は両面加工石器であり、図219-11は整形加工の際に生じた剥片である。コーンはみられず、曲げに近い剥離開始部である。図219-2の二次加工は、打面が深く、剥離開始部が砕けているのでハードハンマーの直接打撃で整形されていると思われる。図219-12が残りの接合資料から剥離された後に、接合資料の上面は敲き折られる。この面は、図219-4の右辺一部にも残されている。

折取後、図面正面側(図219-12剥離作業段階の作業面)を打面として、図219-4・5+6・7・8が剥離

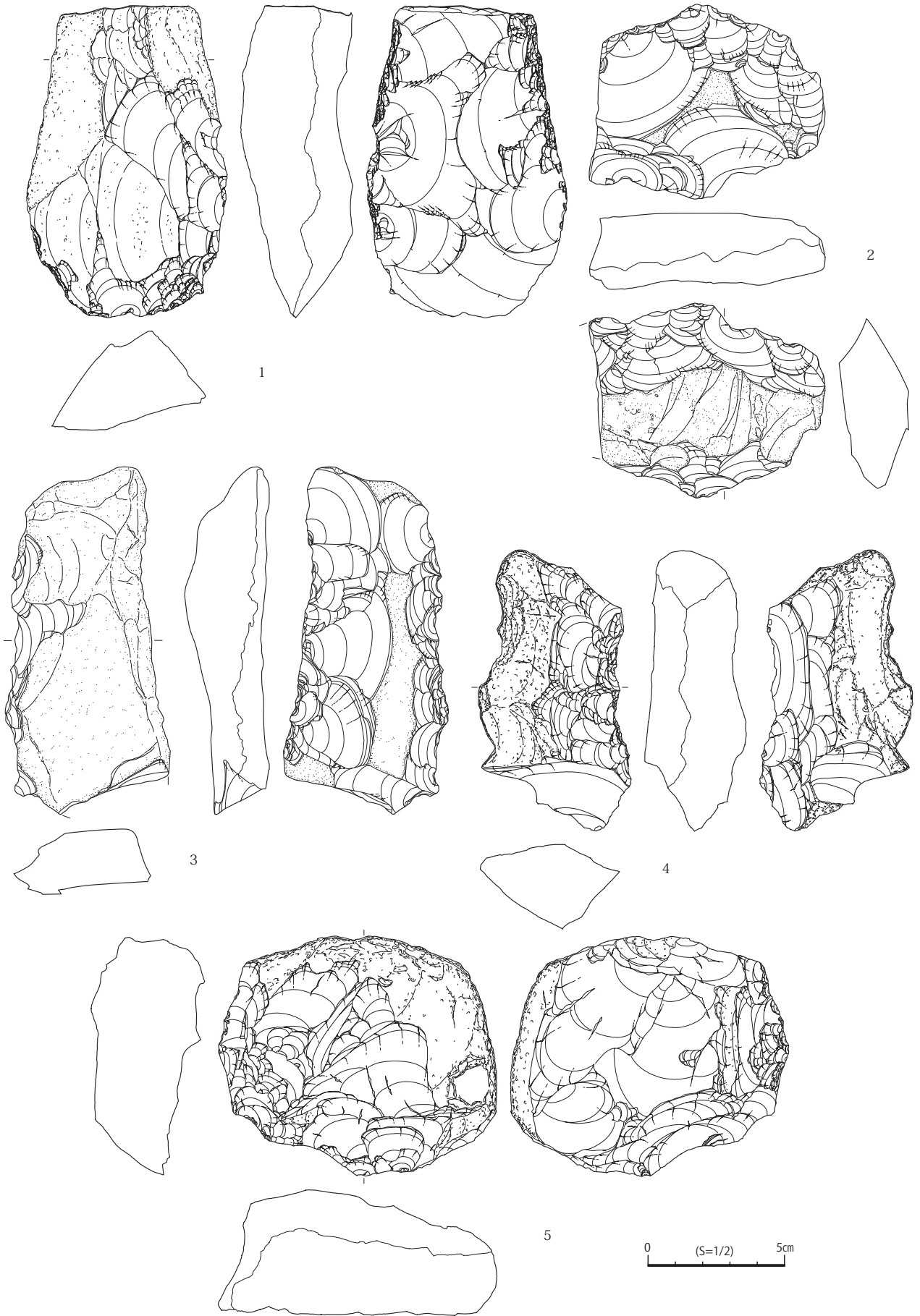


图214 B区遺構外出土遺物(11)

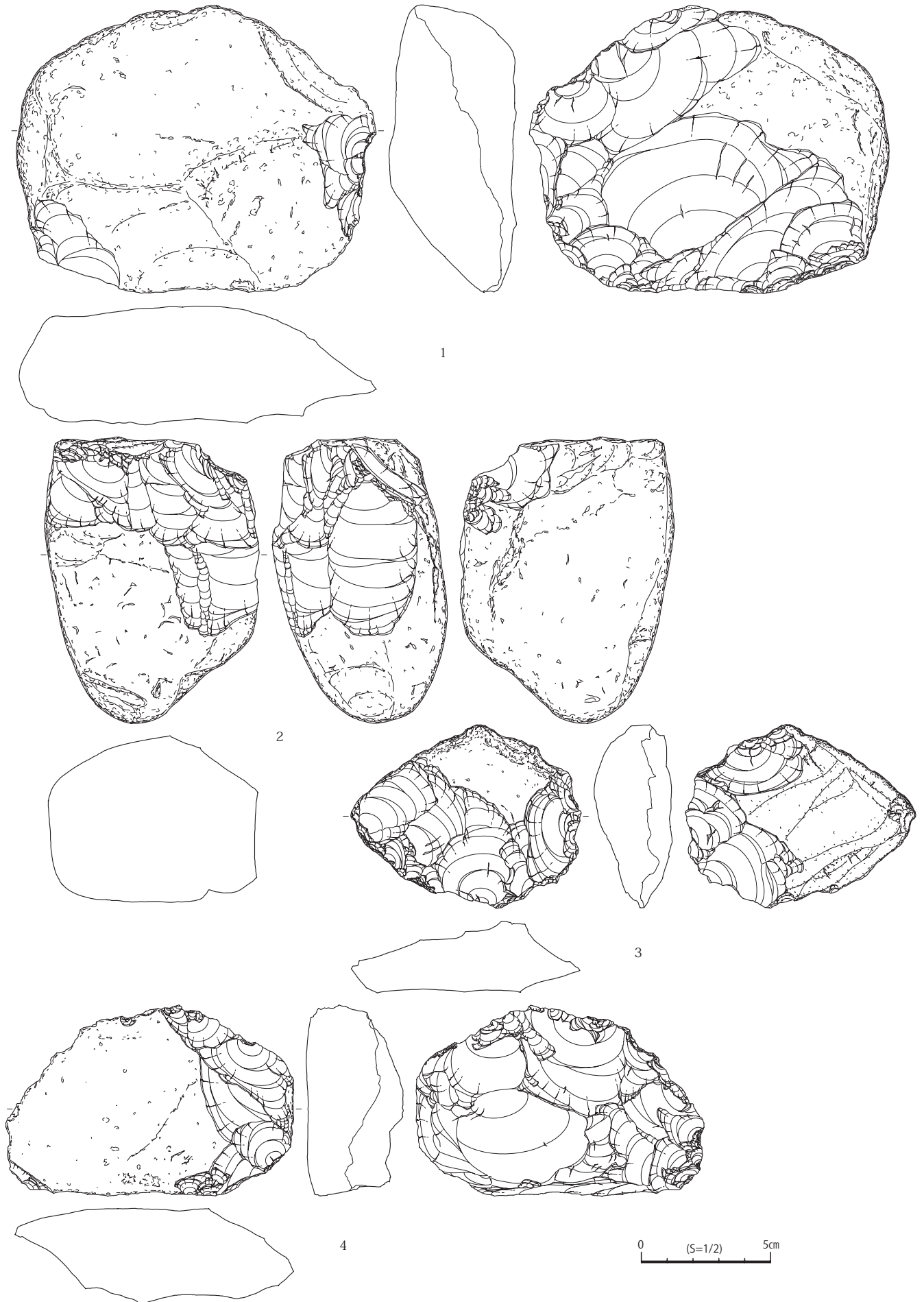


图215 B区遺構外出土遺物(12)



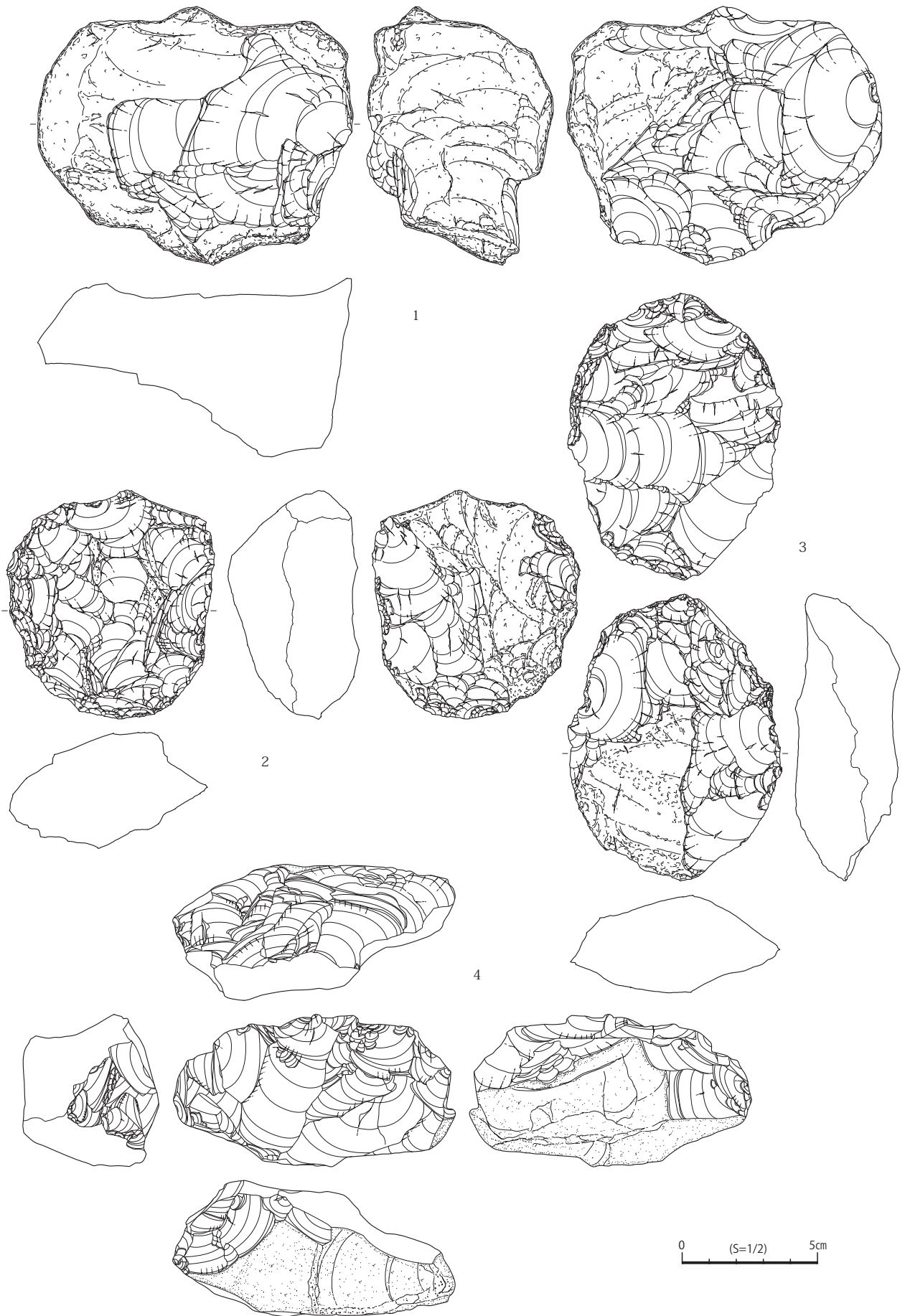


图216 B区遺構外出土遺物(13)

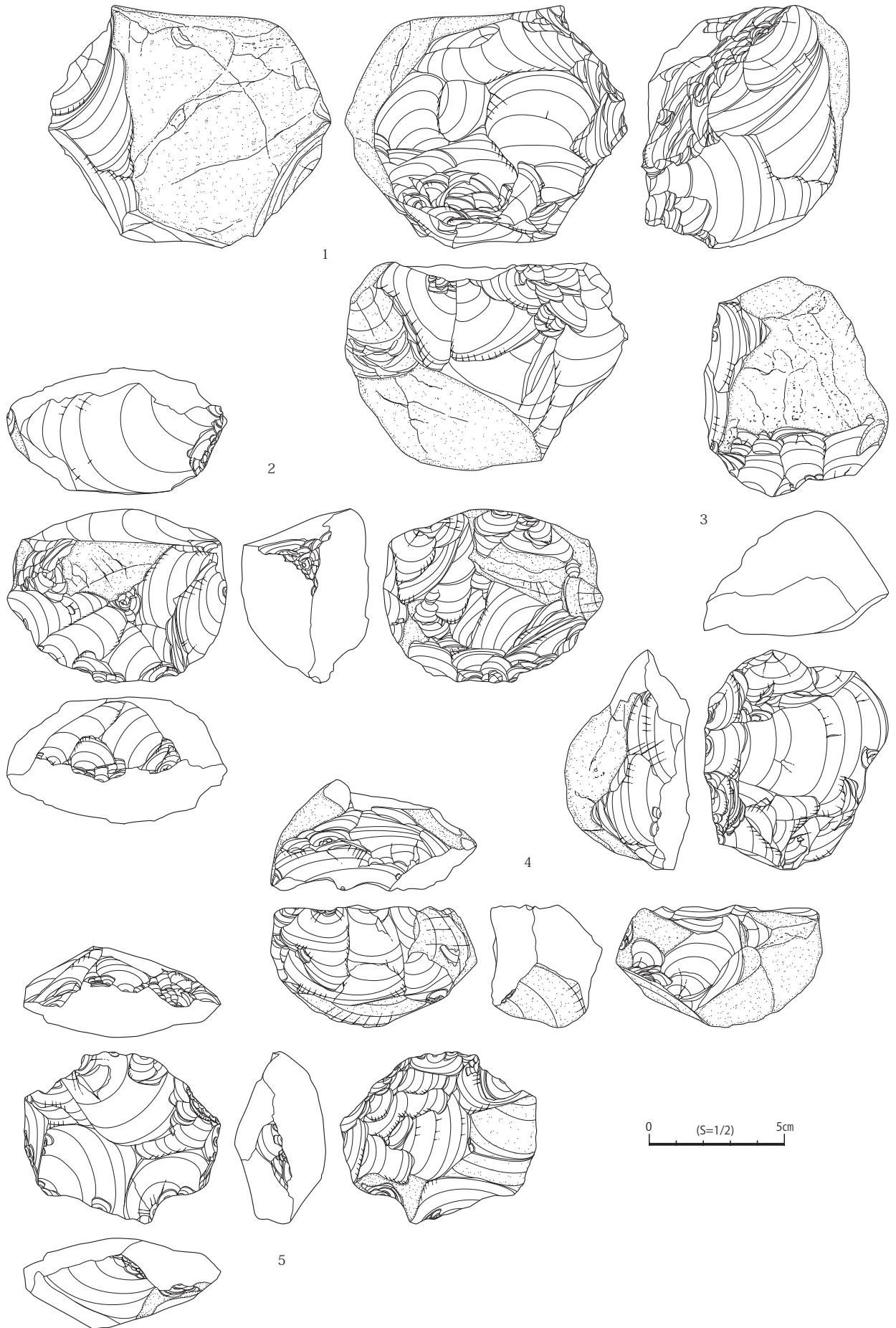


图217 B区遺構外出土遺物(14)

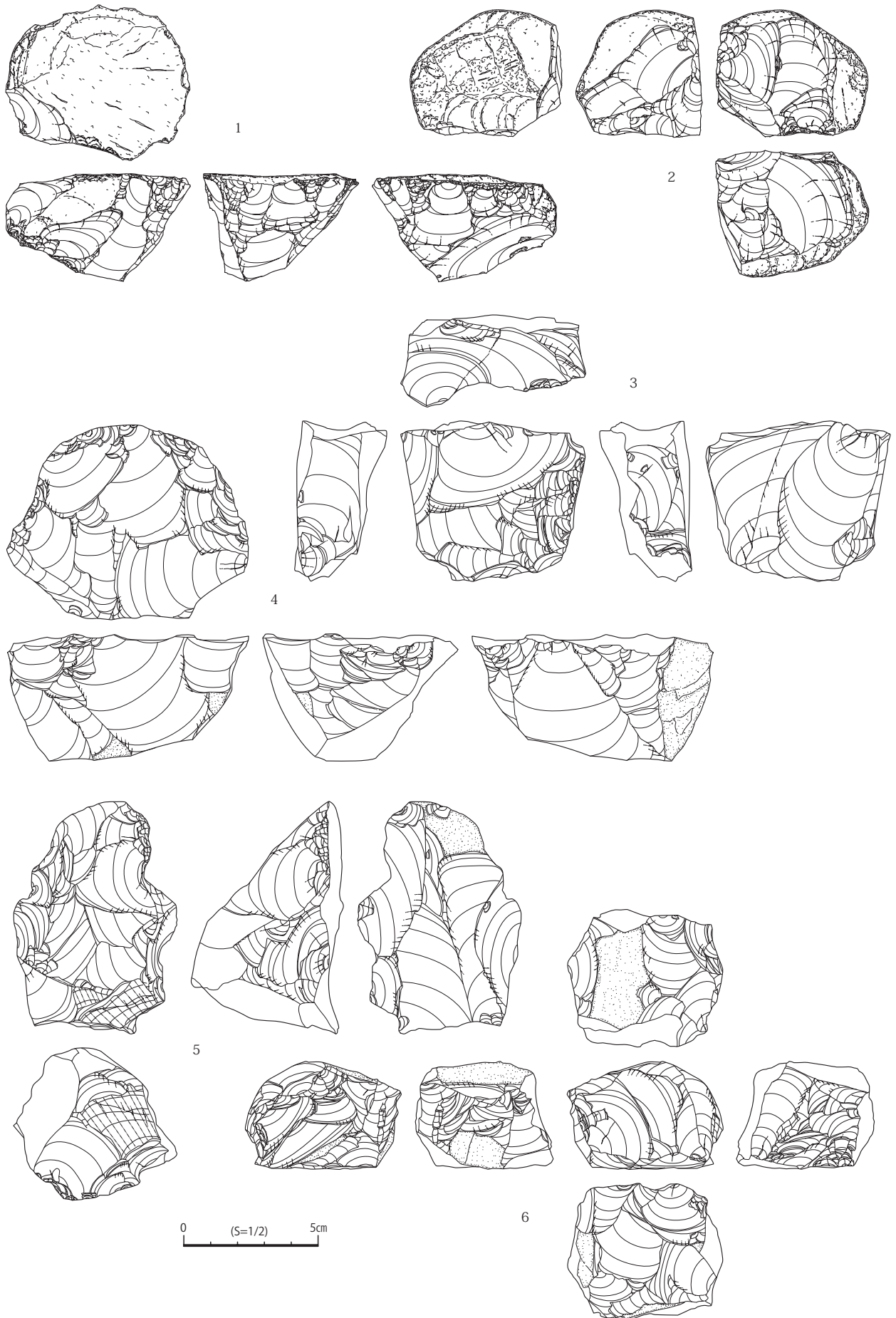


図218 B区遺構外出土遺物(15)



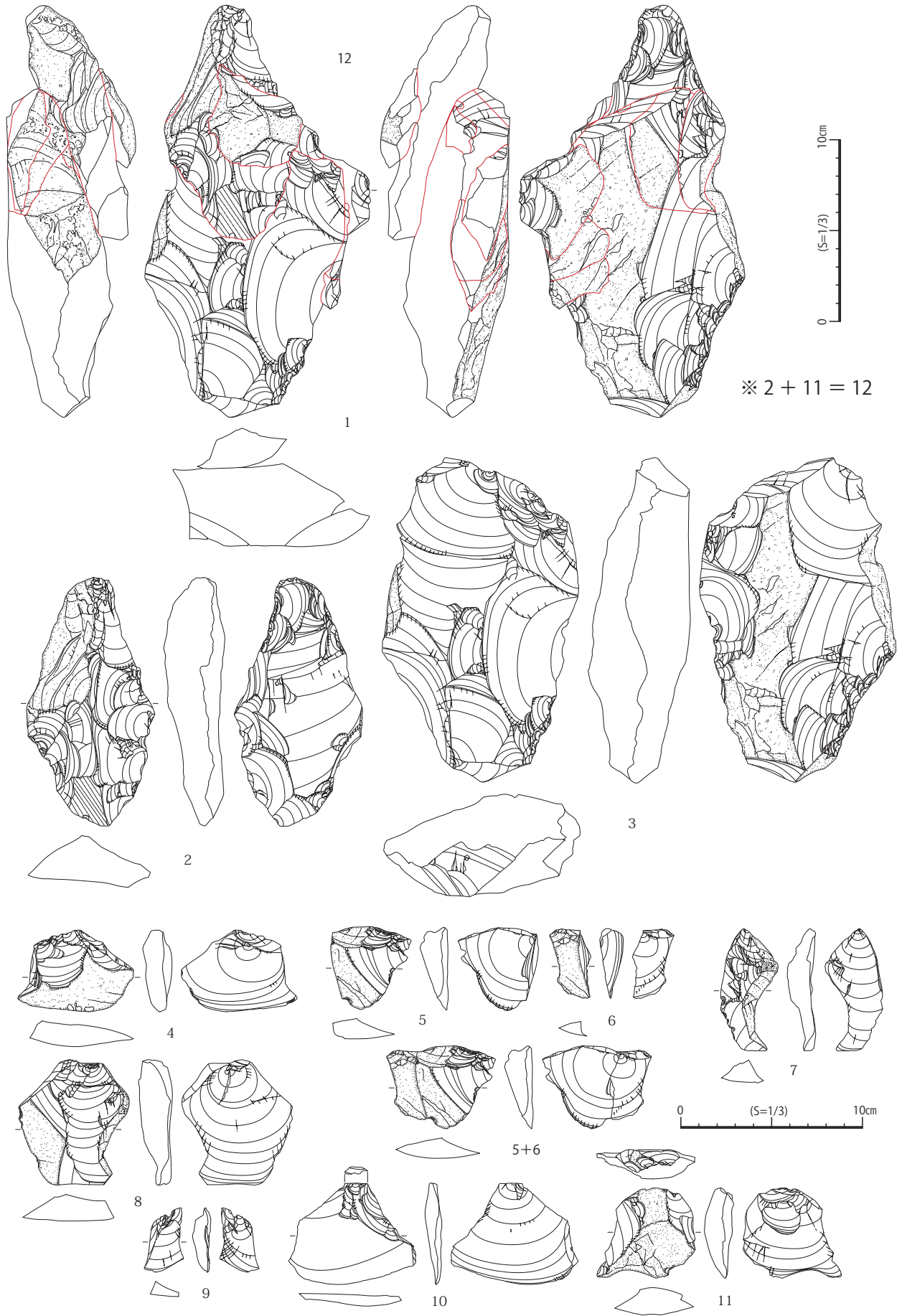


图219 B区遺構外出土遺物(16)

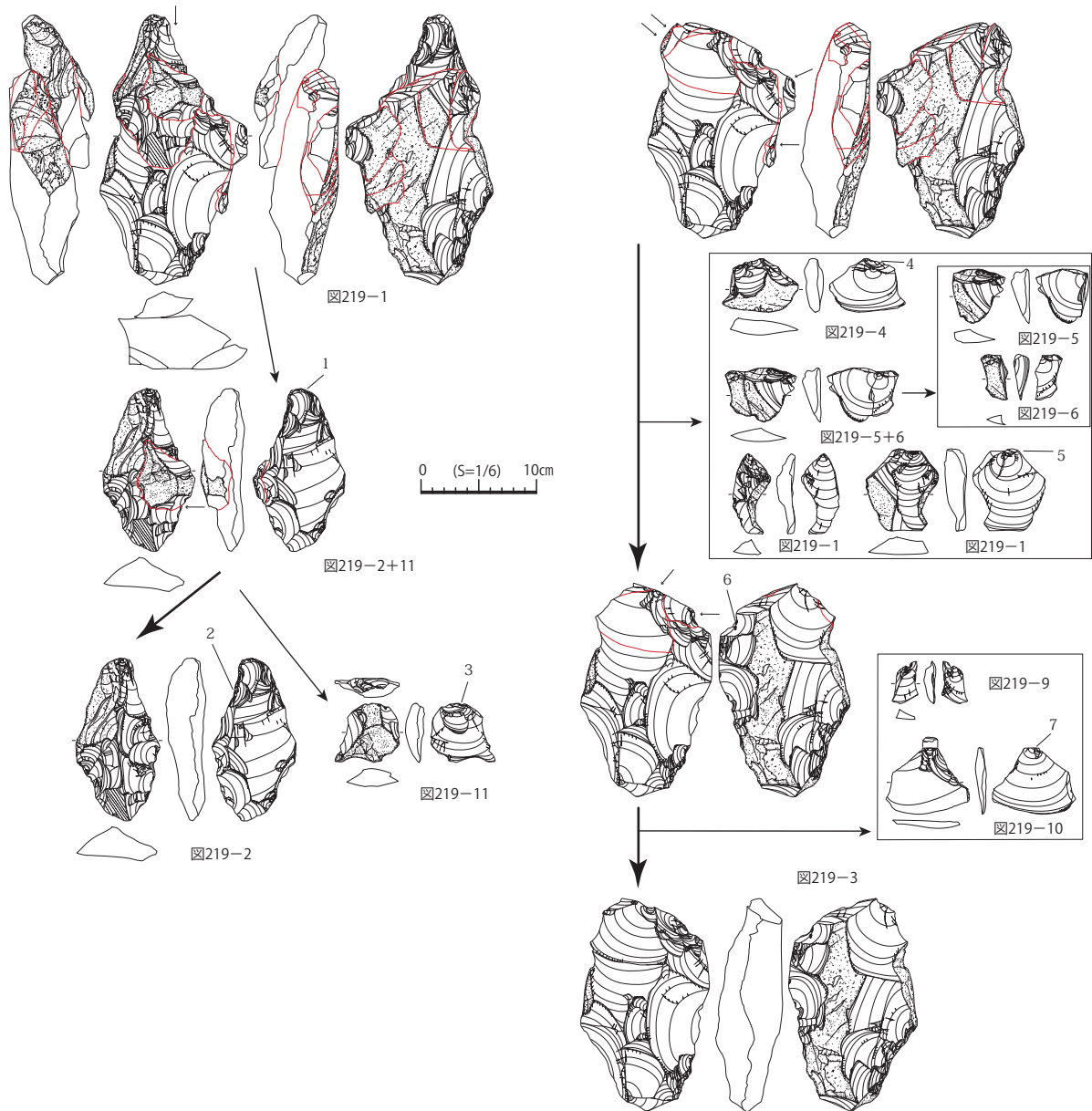


図220 B区遺構外出土遺物(17)

される。コーンタイプの剥離開始部とバルブの発達などから、この剥片はハードハンマーの直接打撃で、剥離されている。図219-4・5+6・7・8の作業面を打面にして、剥離が行われる。図219-4が除去された面にコーンクラックがみられる。1mmほどの径である。このコーンクラックは図219-9を剥離する一連の剥離作業の際に生じたものと思われる。折取面を打面とした図219-10が剥離されている。他の剥片と異なり、コーンが不明瞭でバルブの発達もなく、ソフトハンマーの特徴に近い。

最終的に残核として図219-3の石核が残る。石核としては、球心状の石核に属する資料である。得られた剥片は、図219-2の縦長剥片や図219-4・5+6・8などの矩形剥片が剥離されている。また残された作業面は、多くは矩形剥片であり、末端がフェザーエンドもしくはヒンジエンドである。』

(小田川)

**磨製石斧**(図221-1～15)：29点、約13kg出土し、14点図示した。

1～3は緑色片岩製のⅠ類。1は裏面器面と一側面に擦り切り痕が残る。2・3に擦り切り痕は認められないが、形態・石材からⅠ類と判断した。4はⅡ類。剥離後、敲打調整されたものと考えられるが、刃部の研ぎ出しはなされておらず、未成品の可能性がある。3～12・14はⅢ類とした。12は扁平礫を素材とし、全面を研磨して製作されている。13は擦り切り緑色凝灰岩製の磨製石斧部材。両面から擦り切り、1／3程度の厚さを残して破断されている。15は擦り切り具。刃部はやや弧状をなし、刃部両面には明瞭な線状痕が残存する。

**礫石器**(図222～225)：187点、総重量約88kgが出土している。器種別では、敲き石65点、磨り石41点、半円状扁平打製石器30点、抉入扁平磨製石器2点、礫器11点、凹み石21点、砥石3点、石皿・台石類13点となっている。これらから計47点を図示した。

**敲き石**(図222-1～14)：14点図示した。1～5は石核型のⅠ類である。3を除き稜線部を使用。3は両端部の使用面が幅広なものである。石核型ではないが、Ⅲc類とした6も同様に平坦な使用面が見られる。7～14はⅢc類とした。そのうち、7～11は側縁・側端部使用、12・13は側縁・端部使用型、14は端部使用型である。13は一面に帯状敲打痕が認められる。

**磨り石**(図222-15～図223-1～6)：11点図示した。図222-15～19は器面使用型のⅠa類である。15・16は全面が使用され、微細な線状痕が認められる。18・19は側縁・端部が敲きにも使用されている。図223-1・2・4は側縁使用型のⅠc類。1は両側縁使用、2・4は一側縁使用型で、4の端部には敲打による抉りがつけられる。4は前回の報告で裏面の機能面側でデンプン粒が検出され、植物性の対象物を加工した可能性が高いと指摘されている。図223-3・5・6は北海道式石冠。3は厚身のある扁平礫を素材とし、幅広の機能面を持ち、裏面に向けて大きく片減りしている。6は本来5のような形状をしていたものと考えられるが、その機能面は素材礫の中心軸に対して強く傾斜するほど片減りしている。使用状況から、3は長軸に対して直交する運動方向、一方、6は長軸に平行する使用方向が推定できる。

**半円状扁平打製石器**(図223-7～図224-1～4)：6点図示した。図223-7・8は周縁・側縁を剥離調整するⅡ類。7の周縁部は敲きによる潰れ、両端部には敲打調整によりやや弱い抉りがつけられる。機能面には若干の片減りが認められる。8は二面使用の凹み石の転用品とみられる。裏面の機能面側には線状痕が看取できる。図224-1～4はⅠ類。1～3は両側縁に機能面があり、1・2は敲打・剥離調整による抉りがある。4はⅠ類のなかでも板状礫を素材とした薄身のもので、稜線状の機能部分がある。

**抉入扁平磨製石器**(図224-5)：5は敲打調整による抉りがあるⅡ類である。両側縁に機能面がある。

**礫器**(図224-6～9)：4点図示した。7・8はⅠ類で石錘の可能性がある。6・9はⅡ類。9は端部に向うに従って摩耗度が増す。石棒の可能性もあるが、使用状況をふまえ礫器に含めた。

**凹み石**(図225-1～8)：8点図示した。1・2・4はⅠ類、3・5～7はⅡ類、8はⅢ類である。

**砥石**(図225-9)：9は有縁石皿破片を再利用したⅡ類。側面は使用により段状を呈している。

**台石**(図225-10・11)：10・11は原礫面使用のⅢ類である。11は湾曲した磨り面が両面に認められる。

(業天)



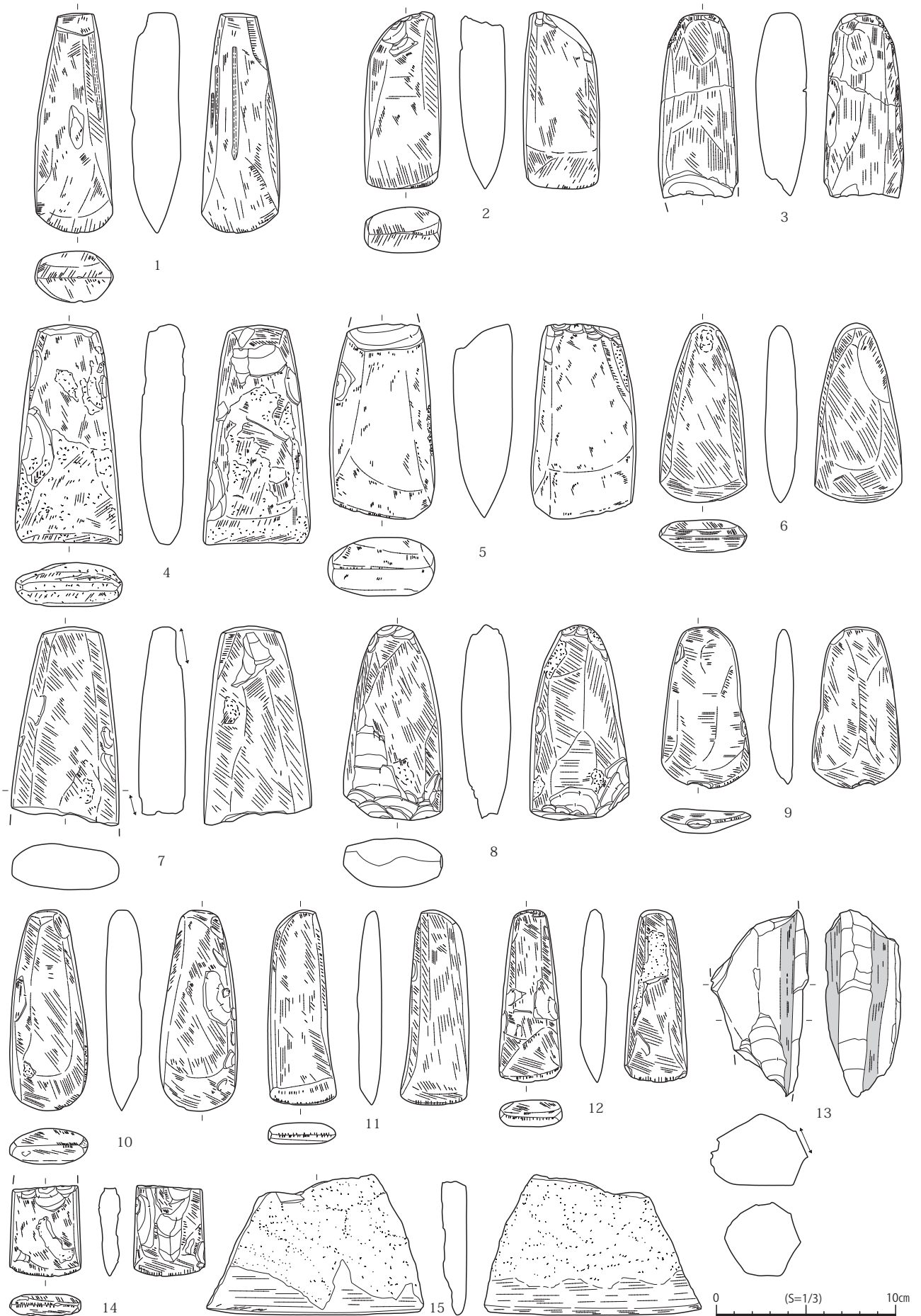


图221 B区遺構外出土遺物(18)

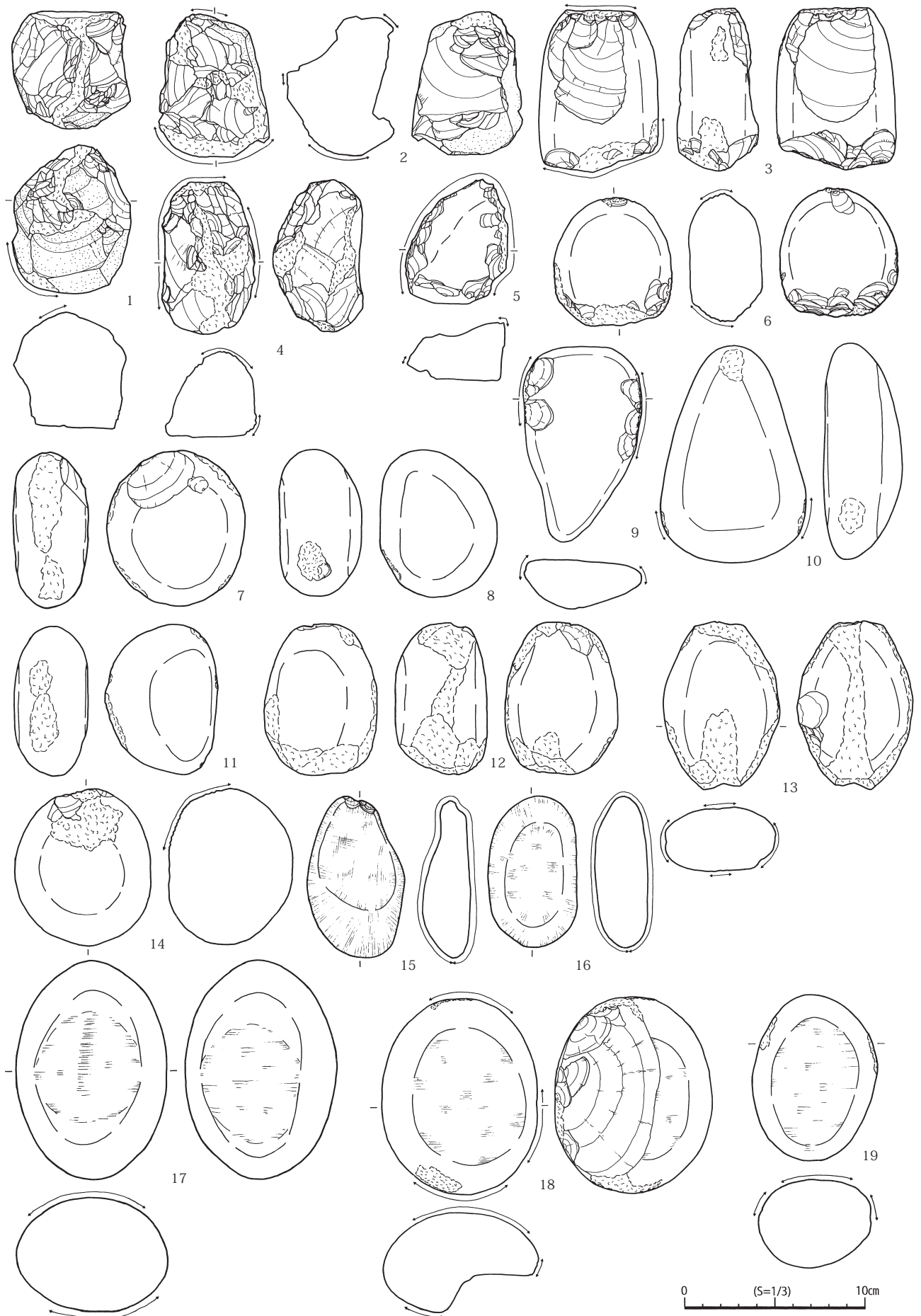


图222 B区遺構外出土遺物(19)

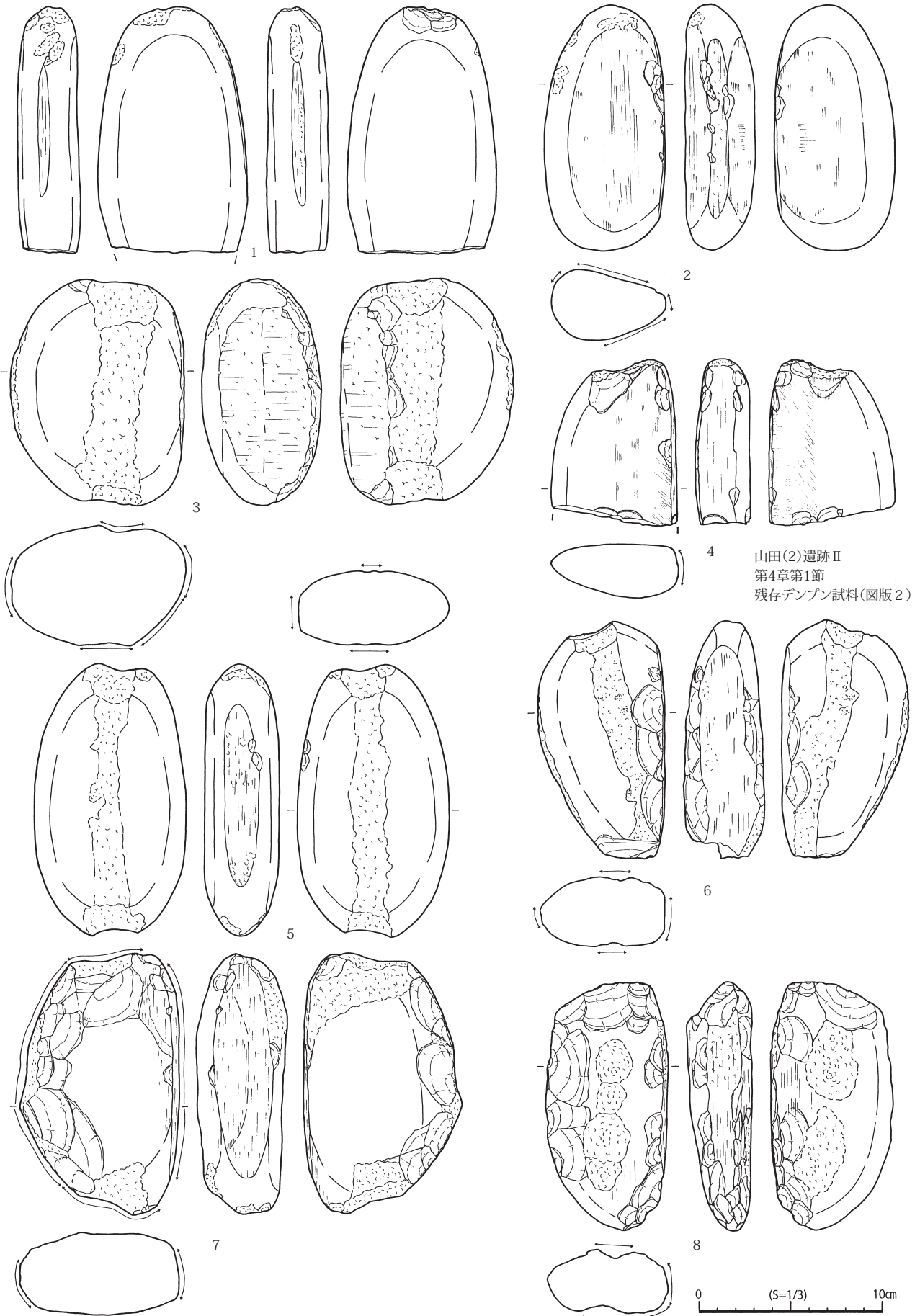


図223 B区遺構外出土遺物(20)



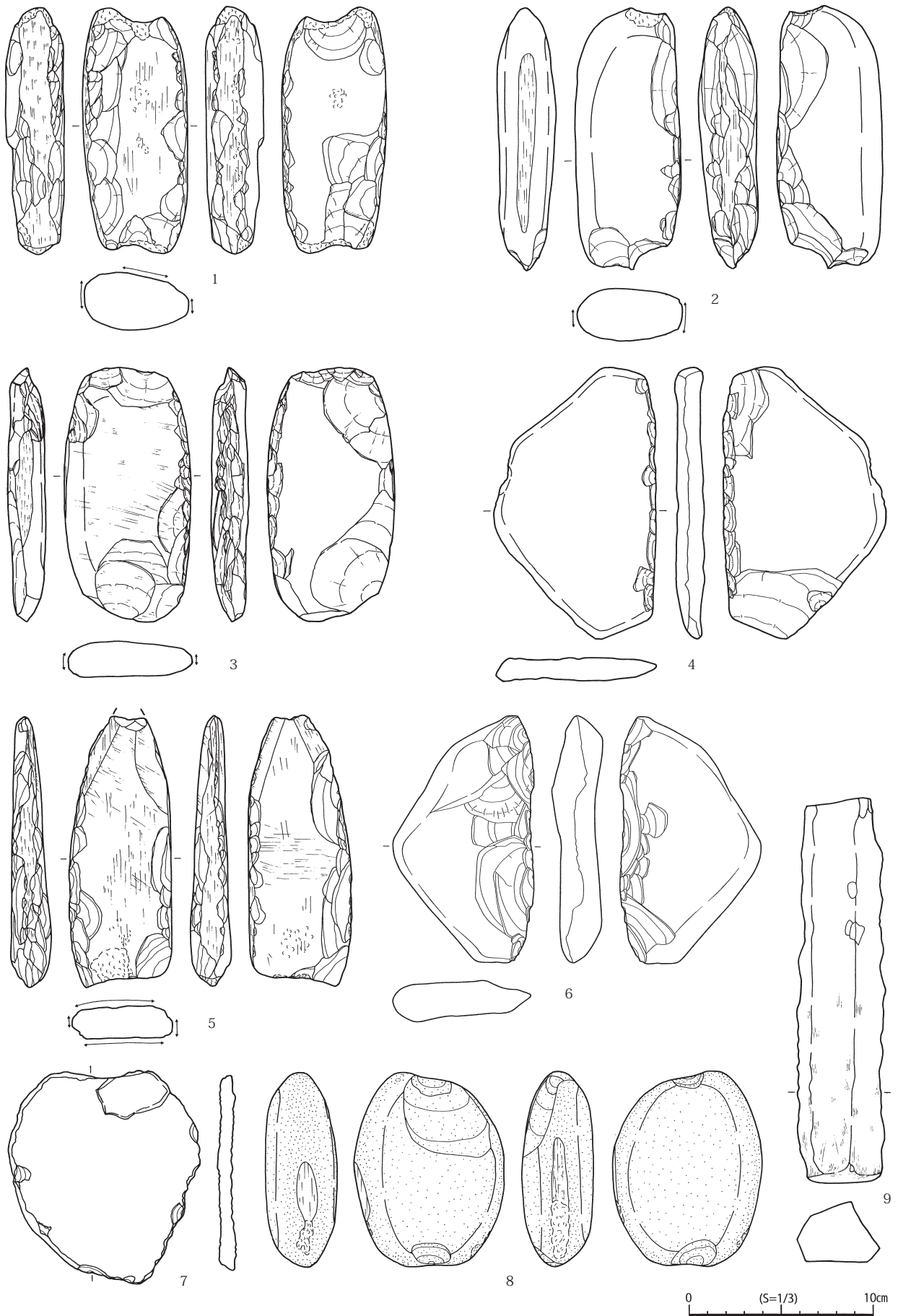


图224 B区遺構外出土遺物(21)

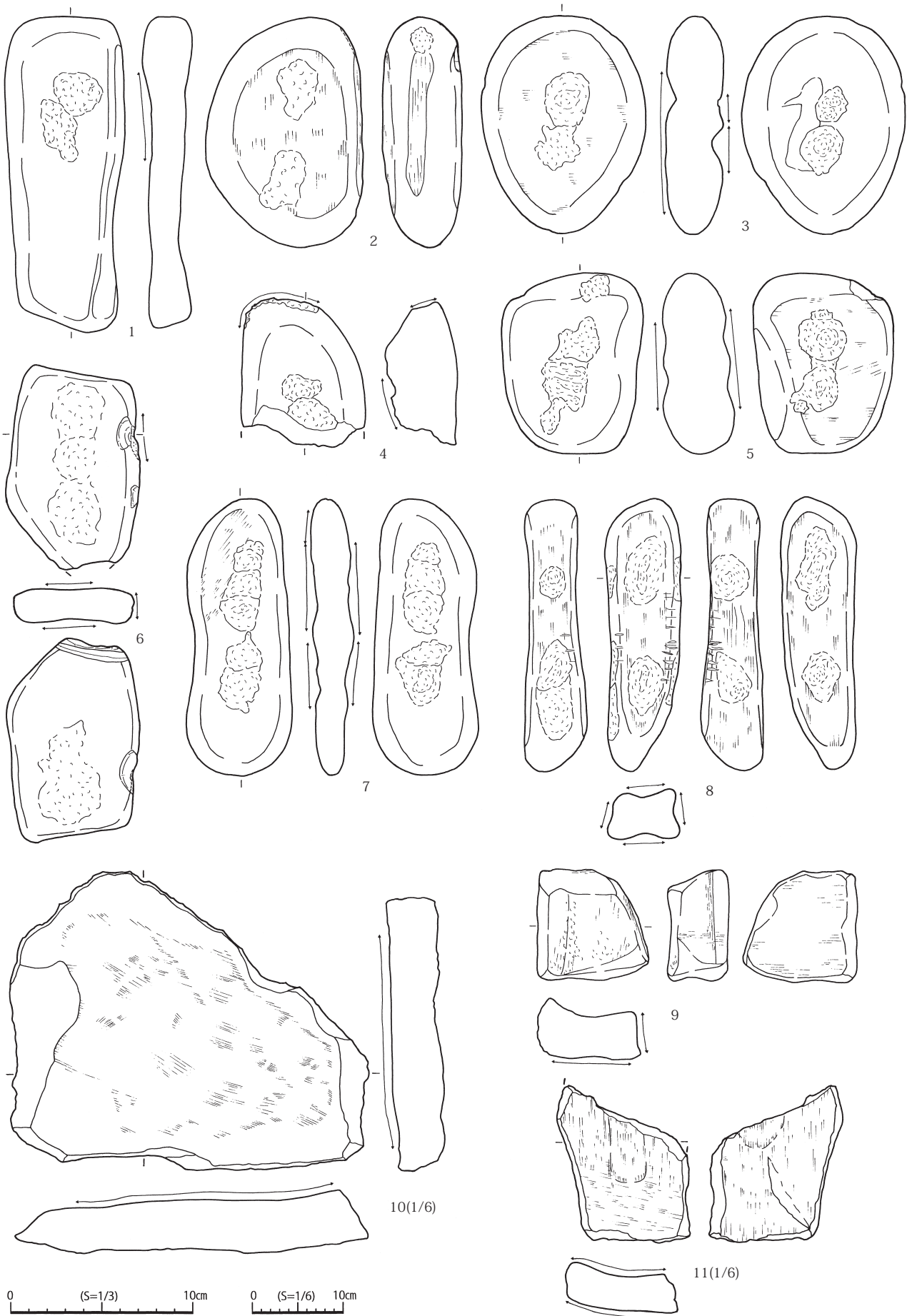


图225 B区遺構外出土遺物(22)

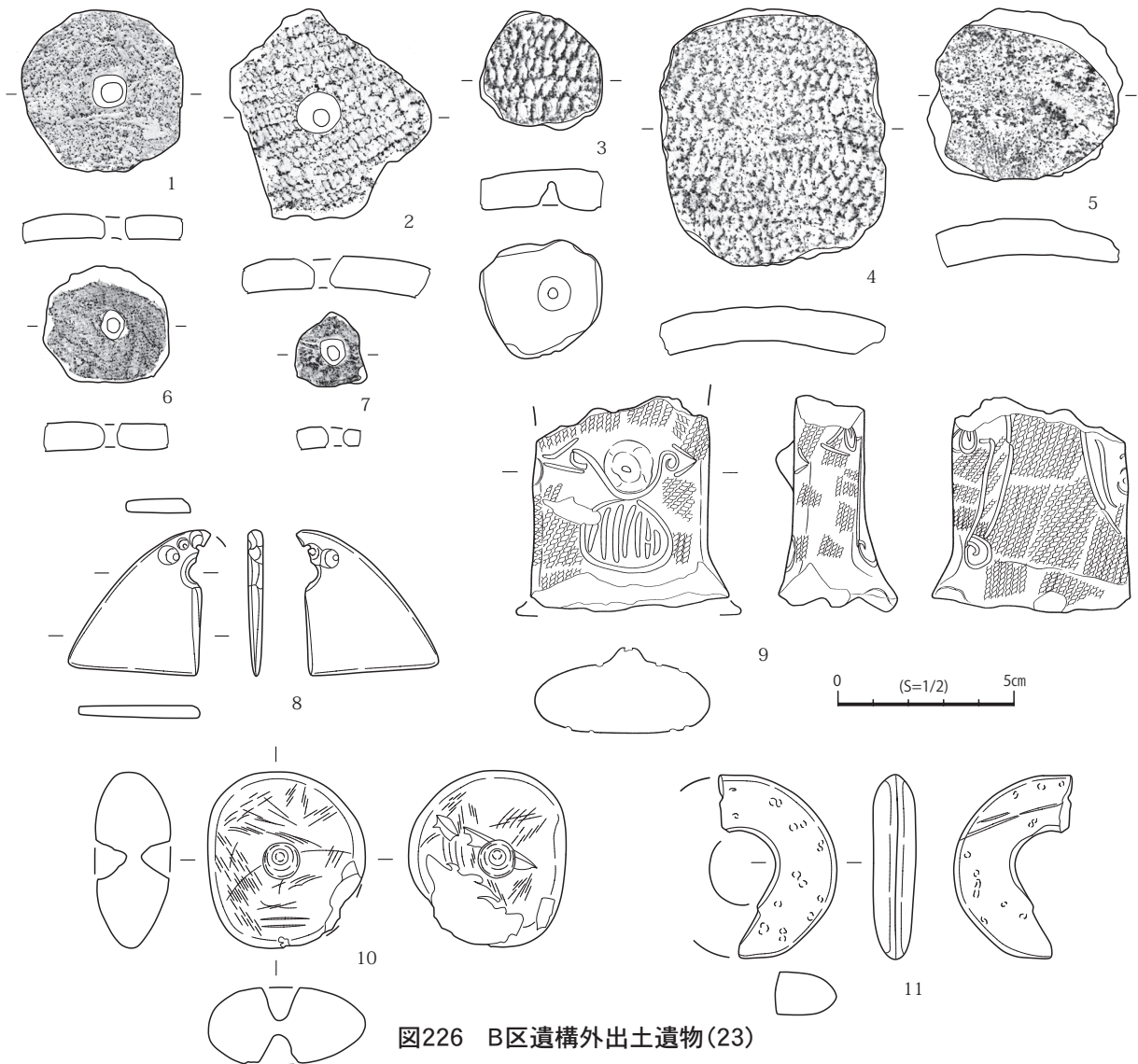


図226 B区遺構外出土遺物(23)

土製品(図226)

土器片円板・土偶が出土している。全点図示した。図226-1～7は土器片円板。前期末葉から後期のものがあり、前者が多数を占める。図226-1・2・6・7は両面穿孔され、図226-3は裏面に穿孔途中の盲孔がある。図226-4は隅丸方形に成形されている。図226-5以外は土器胎土に繊維を含む。図226-3・4は多軸絡条体が施される円筒下層d式。図226-2は結束第1種羽状が施される円筒上層a式、図226-5は中期～後期の土器片の可能性はある。図226-6は底部片が整形されている。図226-9は土偶。胴部下半の破片で地文縄文に沈線で文様が表現され、円錐状の隆帯で臍が表現されている。円筒上層e式以降で中期末葉以前のものと思われる。

石製品(図226)

珧状耳飾り・軽石製品ほかが出土している。図226-8は珧状耳飾り。補修孔と思われる穿孔が近接して3つあけられている。小型で三角形基調のもので、福田のE(b)タイプに相当する(福田：1999)。円筒下層d式～円筒上層a式期に比定されるものだろう。図226-10は装飾品の未製品と思われる。円礫を両面から穿孔しているが貫通していない。図226-11は軽石製の装飾品。半損しているがドーナツ状の輪に成形されている。腕輪には小さすぎるもので耳飾りに使用したものと思われる。他に楕円形に成形されたものが2点出土している。(小田川)



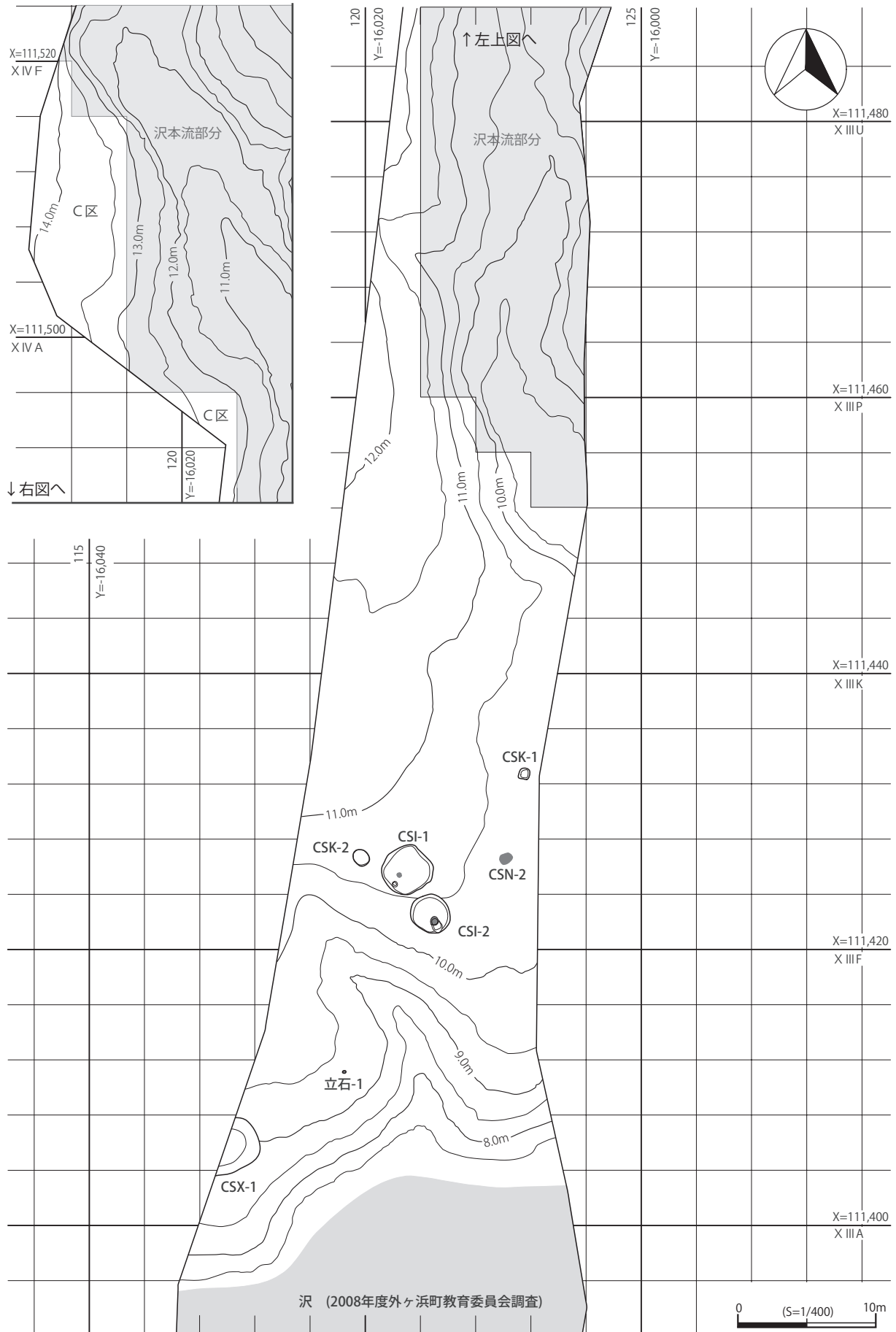


図227 C区遺構配置図

### 第3節 C区の調査

C区は北側は沢本流を境とし、南側は瀬辺地集落へ流れる沢を境とする約1,300㎡の範囲である(図227)。検出遺構は竪穴住居跡2軒、土坑2基、焼土遺構1基、立石遺構1基、用途不明遺構1基である。A・B区に比して遺構・遺物の密度は薄く、主体となる時期も異なる。なお検出遺構の詳細や出土遺物の重量及び内訳等は別表にまとめてある。

#### 1 竪穴住居跡(図228・229)

##### C区第1号竪穴住居跡(CSI-1)(図228)

【位置・確認】C区南側のXⅢH-121・122グリッドに位置し、Ⅲ層上面で落ち込みを検出した。

【規模・形状】北東から南西方向に主軸をとる隅丸方形の住居跡であり、規模は開口部3.45×3.39m、床面2.97×2.92mと小規模である。壁の立ち上がりは緩く、確認面からの深さは約0.2mを計る。

【堆積土】褐色土を主体とした4層に分層した。一部に人為的な堆積要素がみられる。

【付帯施設】住居跡中央から南西寄りに地床炉を1基確認した。35×34cmの円形を呈する。また南西壁際にピットを1基検出した。開口部は41×37cmの楕円形を呈し、深さは26cmである。

【出土遺物】土器、石器が出土した。土器は堆積土出土で、図228-1は鱗状突起の貼付されたもの、図228-2はRL磨消縄文でJ字状文を施したものでⅡ群H類に比定される。図228-3はⅡ群D類、4～5はⅡ群H類であろう。石器はPit1から敲石(図228-6)が、床面直上から砥石(図228-7)が出土している。

【小結】遺構や出土遺物の状況から縄文時代中期末葉(大木10式並行期)の竪穴住居跡とみられる。

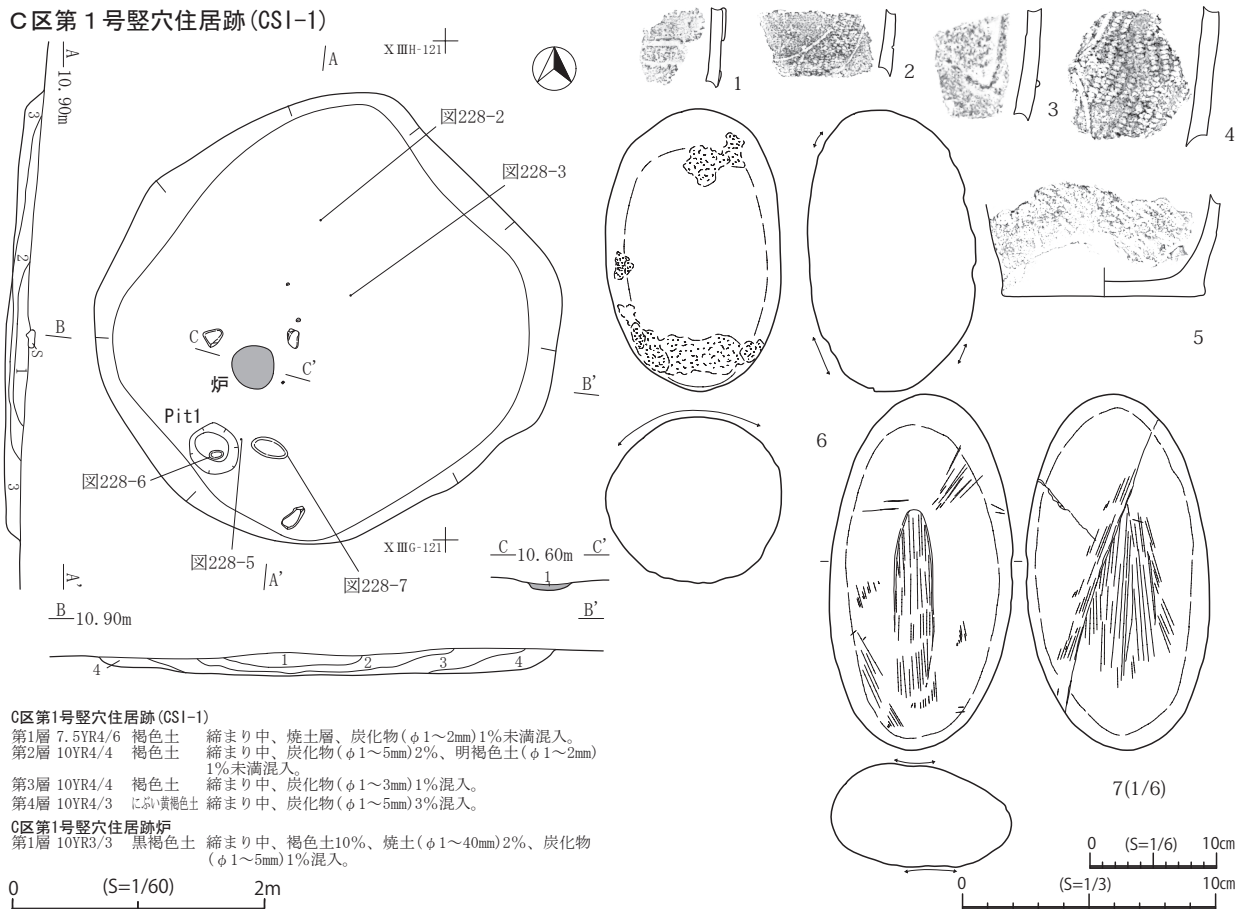


図228 C区第1号竪穴住居跡

### C区第2号竪穴住居跡(CSI-2)(図229)

【位置・確認】C区南側のXⅢG-121・122グリッドに位置し、Ⅲ層上面で落ち込みを検出した。

【規模・形状】楕円形の住居跡で、開口部2.85×2.74m、床面2.50×2.48mと小規模の住居跡である。壁の立ち上がりは緩く、確認面からの深さは約0.2mを計る。

【堆積土】3層に分層した。褐色土を主体とした自然堆積とみられるが、南西壁寄りの床面から炭化材が出土しており、焼失住居である可能性もある。

【付帯施設】住居跡南東壁に複式炉を検出した。全長120cmで、燃焼部は62×60cmの楕円形状を呈し、掘り込みは30cmほどである。北側壁は急な立上がりで被熱も強いが、通常の複式炉で想定される石組みや抜き取りの痕跡等は検出されなかった。前庭部は58×74cmの楕円形で、掘り込みは24cm程度と浅いが底面は堅く踏み締められたような状態であった。なお燃焼部堆積土から出土した炭化材試料の放射性炭素年代測定では $3,930 \pm 20$ yrBPとの結果を得ている(第4章)。

【出土遺物】土器、石器、土製円板が出土している。土器は堆積土からの出土でⅡ群H類とした大木10式並行の土器に比定されるものである。図229-1はU字状文と波頭状文が施されるもので、縦回転のRL縄文が充填施文される。図229-2～5も縄文原体が縦回転施文される土器で、図229-3は横位の沈線文が施される。石器は床面直上から小型石槍(図229-6)、砥石(図229-10)、石棒(図229-7)、台石(図229-9)が、堆積土から石核(図229-8)が出土した。ほか土製円板が1点堆積土から出土している(図229-11)。

【小結】遺構や出土遺物から縄文時代中期末葉(大木10式並行期)の竪穴住居跡とみられる。

## 2 土坑(図230)

2基の土坑を検出したが、極めて浅いものである。第1号土坑はXⅢJ-123グリッドに位置する。開口部約80cm程度の土坑で、土坑内には剥片が集中して廃棄されていた。第2号土坑はXⅢH-120グリッドに位置する。開口部120×100cm程度の土坑で堆積土から土器の細片と剥片が出土している。ともに明瞭な時期決定の根拠に欠けるため、詳細等は不明である。

## 3 焼土遺構(図230)

1基の焼土遺構を検出した(第1号焼土遺構は、第1号竪穴住居跡の堆積土と判明したことから除外)。第2号焼土遺構はXⅢH-123グリッドに位置し、99×76cmの楕円形状の被熱範囲として検出した。直接的な出土遺物はないため時期等の詳細は不明である。

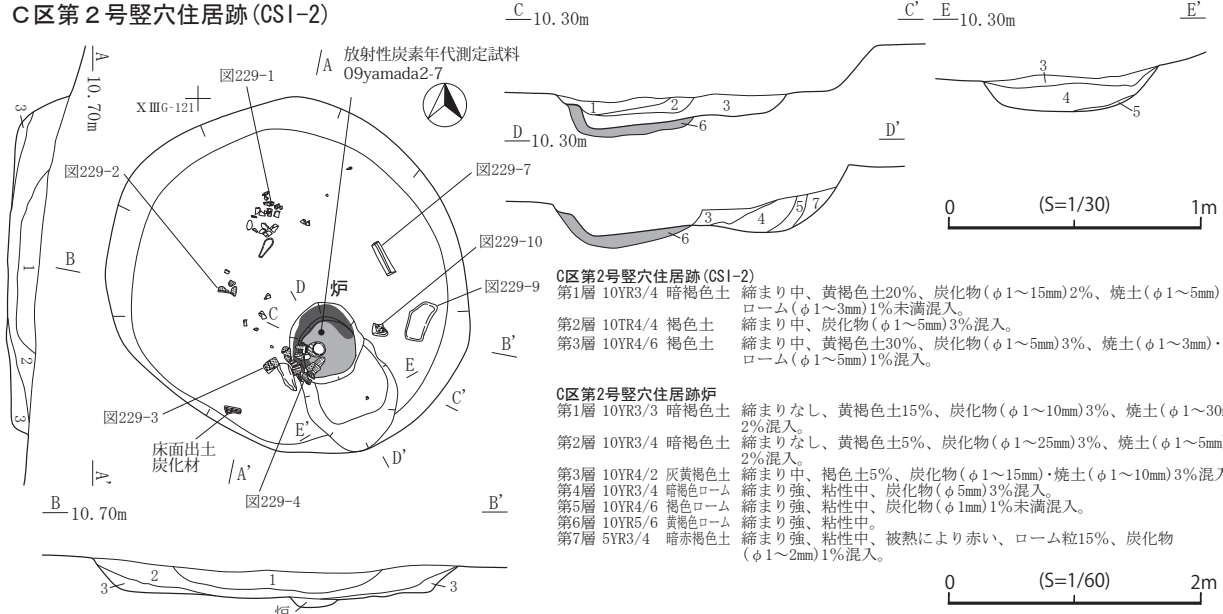
## 4 立石遺構(図230)

1基の立石遺構を検出した。C区南側のXⅢD-120グリッドに位置し、南端の沢の落ち際に単独で構築されている。立石として使用されているのは全長約29cm、幅約21cmの大型の凝灰岩で(図230-4)、台石を転用している。径約30cm程度の掘り方の中に、側縁の凹みのある部分を下にして立てている状態であった。他に遺物等は無く、周辺からも時期決定の根拠となり得るものは出土していないため、詳細は不明である。

(神)



C区第2号竖穴住居跡(CS1-2)



- C区第2号竖穴住居跡(CS1-2)**
- 第1層 10YR3/4 暗褐色土 縮まり中、黄褐色土20%、炭化物(φ1~15mm)2%、焼土(φ1~5mm)・ローム(φ1~3mm)1%未滴混入。
  - 第2層 10TR4/4 褐色土 縮まり中、炭化物(φ1~5mm)3%混入。
  - 第3層 10YR4/6 褐色土 縮まり中、黄褐色土30%、炭化物(φ1~5mm)3%、焼土(φ1~3mm)・ローム(φ1~5mm)1%混入。

- C区第2号竖穴住居跡炉**
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 縮まりなし、黄褐色土15%、炭化物(φ1~10mm)3%、焼土(φ1~30mm)2%混入。
  - 第2層 10YR3/4 暗褐色土 縮まりなし、黄褐色土5%、炭化物(φ1~25mm)3%、焼土(φ1~5mm)2%混入。
  - 第3層 10YR4/2 灰黄褐色土 縮まり中、褐色土5%、炭化物(φ1~15mm)・焼土(φ1~10mm)3%混入。
  - 第4層 10YR3/4 暗褐色ローム 縮まり強、粘性中、炭化物(φ5mm)3%混入。
  - 第5層 10YR4/6 褐色ローム 縮まり強、粘性中、炭化物(φ1mm)1%未滴混入。
  - 第6層 10YR5/6 黄褐色ローム 縮まり強、粘性中。
  - 第7層 5YR3/4 暗赤褐色土 縮まり強、粘性中、被熱により赤い、ローム粒15%、炭化物(φ1~2mm)1%混入。

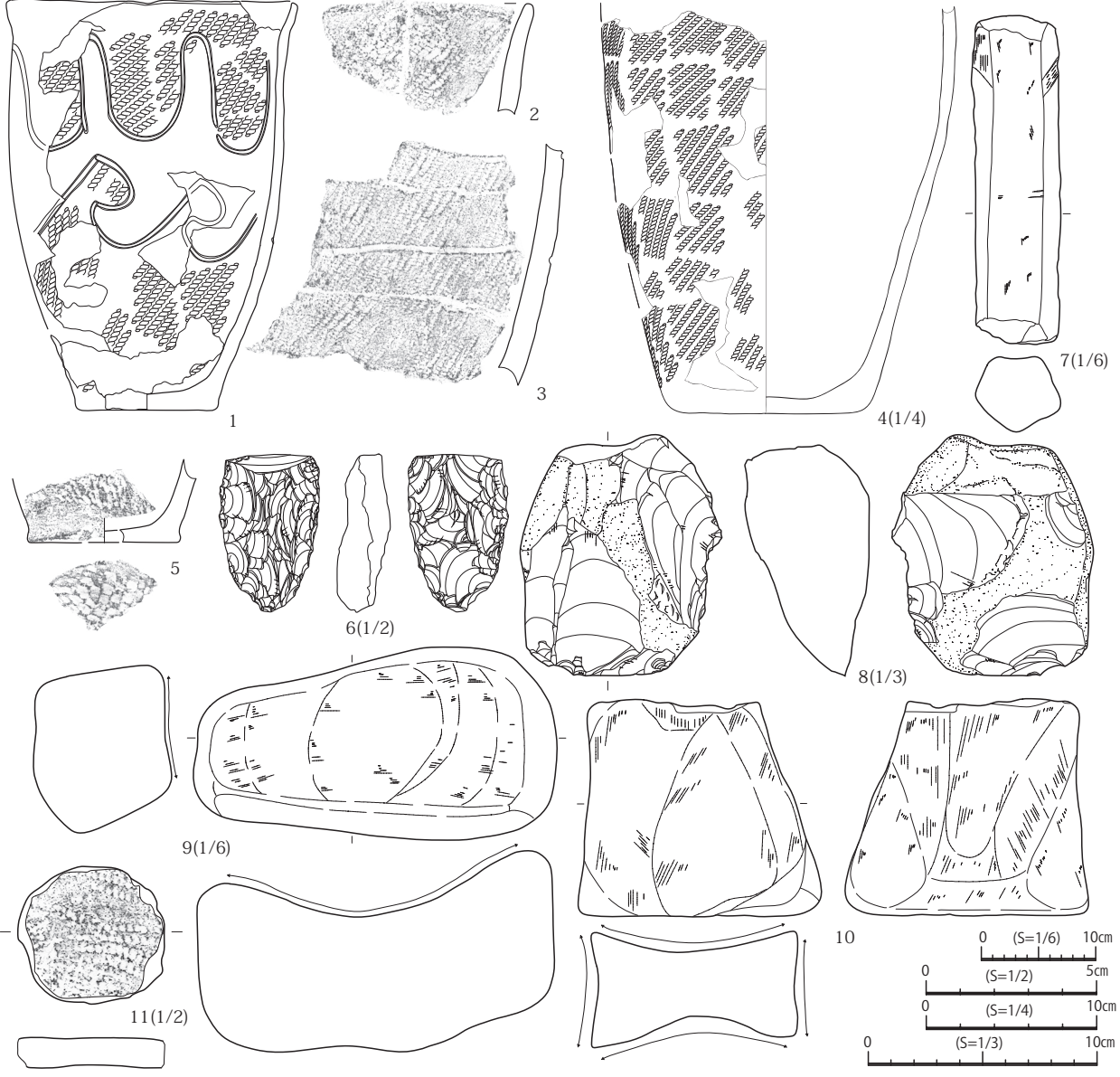
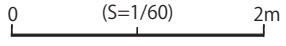


図229 C区第2号竖穴住居跡

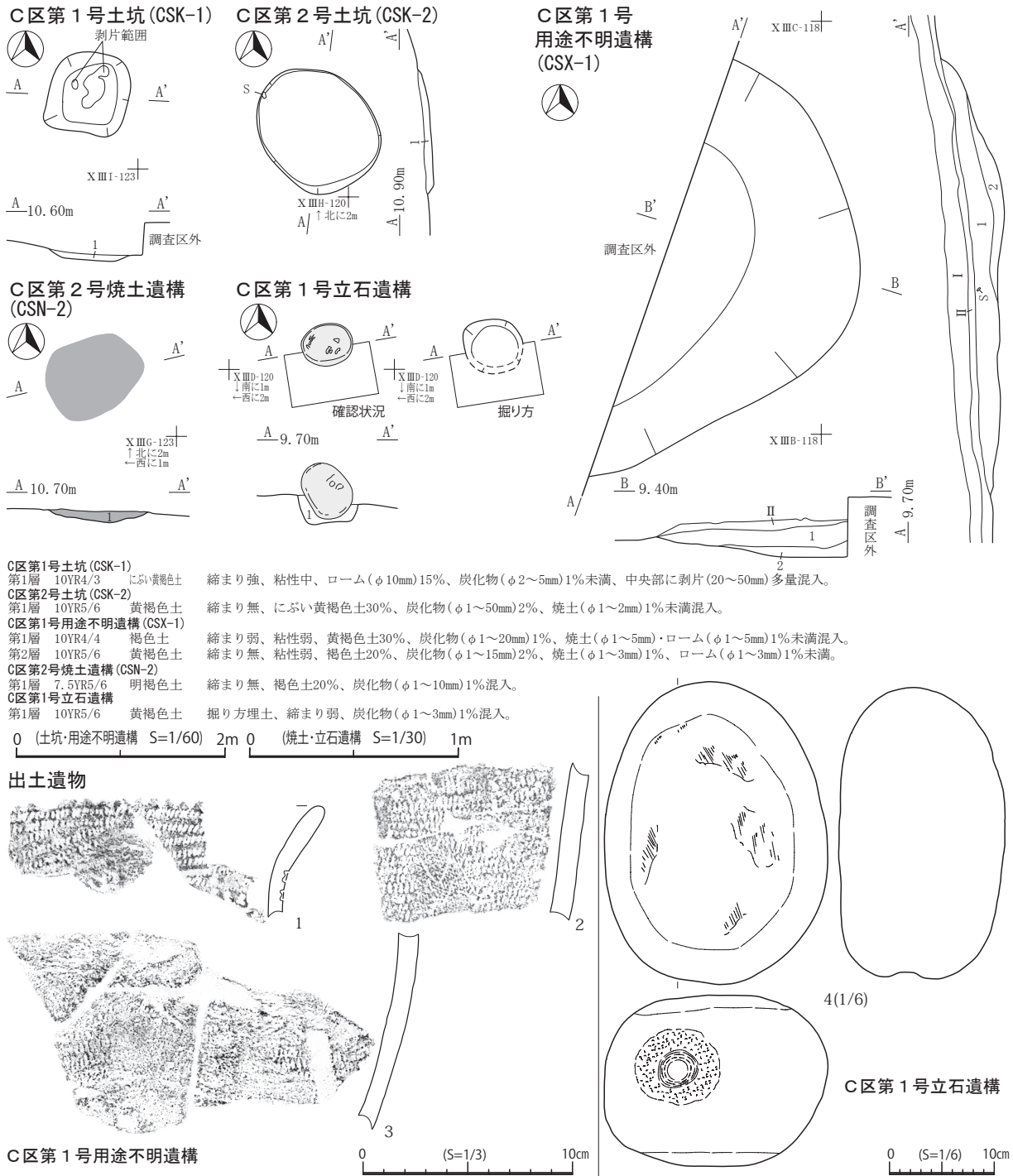


図230 C区土坑・用途不明遺構・焼土遺構・立石遺構

### 5 用途不明遺構 (図230)

1基の用途不明遺構を検出した。調査区の南端に近いX III C-118グリッドに位置し、西側は調査区外へ伸びている。調査部分は開口部で約3.1×2.7mの楕円形状を呈するが、底面は不明瞭で、壁面境界も曖昧であり、前年度に調査したA区の第1号用途不明遺構に類似する形態である(前回報告第495集)。堆積土からI群B類土器の破片が出土している(図230-1～3)。口縁部片は単軸絡条体の側面圧痕が配され、胴部片は多軸絡条体が回転施文されるもので、前期末葉の円筒下層d2式に比定される。ほか図示していないがスクレイパーが2点堆積土から出土している。(神)



## 6 遺構外出土遺物(図231～234)

### 土器(図231)

C区遺構外からは重量で約19kgの土器が出土しているが、密度的に非常に薄く、調査区全体に細片が散在している状態であった。時期は縄文時代中期中葉から末葉のものが大半で、A・B区で主体をなす前期末葉から中期前葉の遺物は少ない。当然ながら検出遺構の時期と連動しているであろう。

図231-1と2はLRL縄文が横回転施文される同一個体の土器で、底部にも縄文が施文される。胎土は比較的堅緻であり若干の繊維を含んでいる。I群C類の粗製土器としたが、底部への施文や胎土の状態から縄文時代前期中葉の円筒下層a式前後の土器に比定される可能性がある。山田(2)遺跡全体でも最も古い類であろう。図231-3～7はII群C・D類である。3は口頸部に横位の隆帯と刺突列が

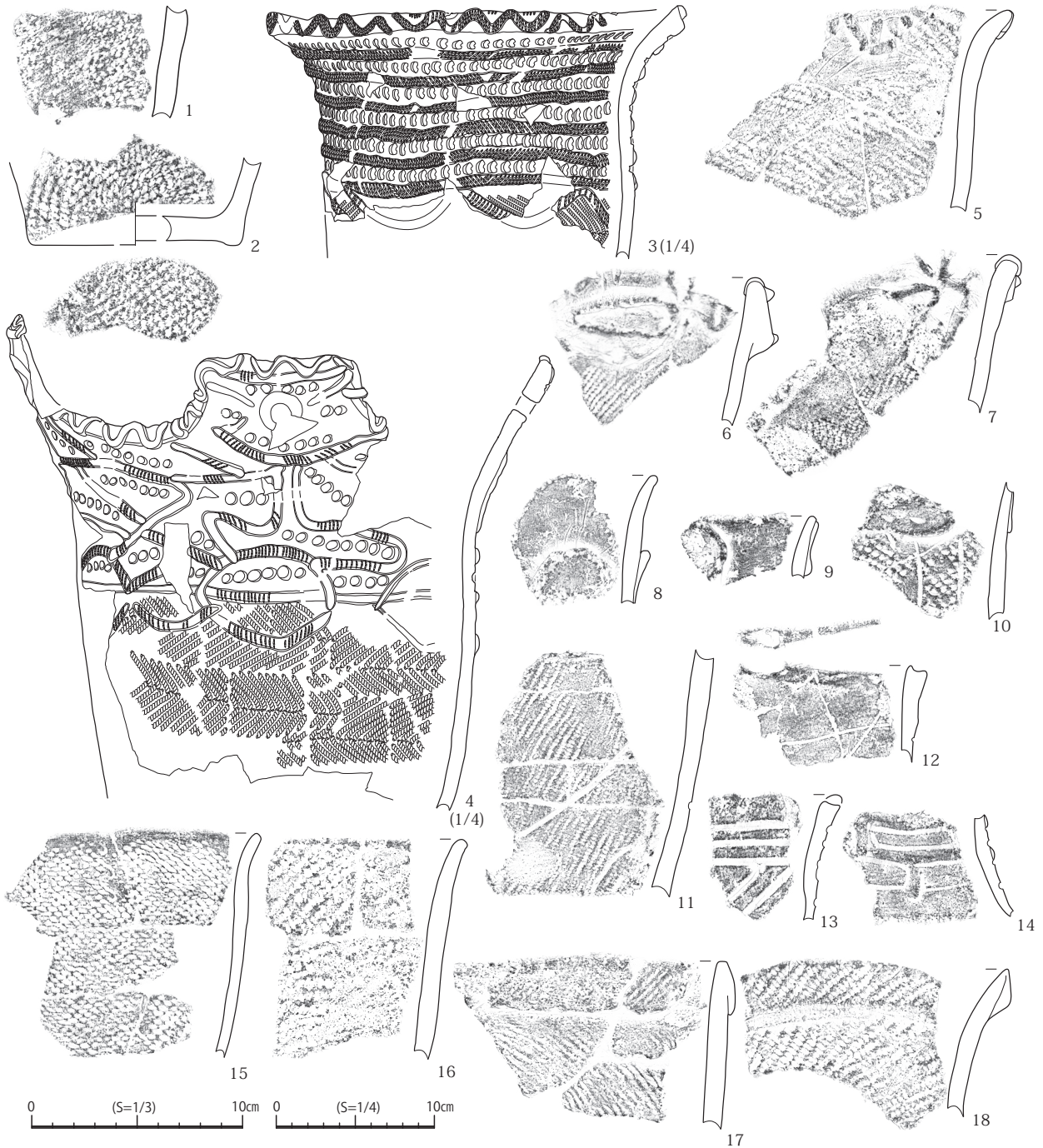


図231 C区遺構外出土遺物(1)



交互に配されるもの、4は大振りな波状口縁の土器で広い口頸部文様帯に隆帯と刺突が施されるもので、円筒上層c式に比定される。6と7は波状口縁の波頂部に楕円形状の貼付が施される同一の土器で、中期中葉の円筒上層d式であろう。図231-8～11はⅡ群H類とした中期末葉の大木10式並行の土器で、8～10は鱗状突起が貼り付けられるもの、11は波頭文と推定される沈線が施されるものである。図231-12～14はⅢ群C類で後期前葉の十腰内Ⅰ式に比定され、沢本流の後期前葉廃棄ブロック出土土器とほぼ同時期のものとみられる(図174)。12は波状口縁の波頂部に指頭状の押圧のあるもので、無文地に横位の細い沈線文が施されている。13は微隆帯と沈線文の組み合わせされたもの、14は無文地に3本一組で沈線文が描かれるものである。図231-15～18はⅣ群で、中期から後期に相当する粗製深鉢を一括したが、土器の施文や胎土等から大半はⅡ群H類にともなうものとみられる。15と16は地文縄文のみ、17と18は折り返し口縁と地文縄文のものである (神)

### 剥片石器(図232・233)

遺構外からは、石鏃3点、石槍10点、小型石槍9点、石篋4点、石槍または石篋の破損品1点、石錐1点、スクレイパー類33点、両面調整石器3点、石核32点、R・f 21点、U・f 15点、剥片・碎片約47kgが出土している。これらから30点を図示した。

図232-1～3は石鏃。1はⅠa類、2・3はⅡc類。図232-4～10は小型石槍。Ⅱ類のものは無く、5～7はⅠa類、4・8はⅠb類。図232-11～17は石槍。中型の11～14と大型の15～17に分けられる。11・16・17はⅡa類、12・13・15はⅡb類。図232-18・19は石篋。18はⅡa類、19はⅡb類。図232-20は石錐のⅢ類。図233-1～9はスクレイパー類。Ⅰa類が1・7、Ⅰb類が6、Ⅰc類が2、Ⅱa類が8、Ⅱc類が9、Ⅲa類が5、Ⅲb類が3、Ⅲc類が4で各類のものが出土している。4は三脚石器の様である。図233-10は両面調整石器。Ⅲ類としたがⅡ類の可能性もある。石核は図示しなかったが、A・B区の遺構外出土石器で図示した石核と変わるところはなく、原礫面打面で剥離されるものが多い傾向にある。 (小田川)

### 磨製石斧(図234)

図234-1～6は磨製石斧で、出土した6点を全て図示した。1・2はⅡ類、3～6はⅢ類である。5はⅢ類としたが、一側面に敲打痕がわずかに看取できるためⅠ類の可能性もある。

### 礫石器(図234)

礫石器は16点、総重量約9kgが出土している。うち7点を図示した。図234-7・9は敲き石Ⅲc類である。図234-8・10は石冠類。8はⅡb類。左右対称形で、各面は緩く湾曲し、全面に研磨調整がなされるが、頂部は両面から尖鋭になるよう研磨が施される。底面の両端中央は両側面にかけてやや粗い研磨により弧状に凹んでいる。10は北海道式石冠。図234-11は凹み石Ⅰ類。図234-12は半円状扁平打製石器Ⅰ類。図234-13は台石Ⅲ類である。

### 土製品(図234-14)

土製品は1点図示した。図234-14は底部片を利用した土器片円盤である。 (業天)

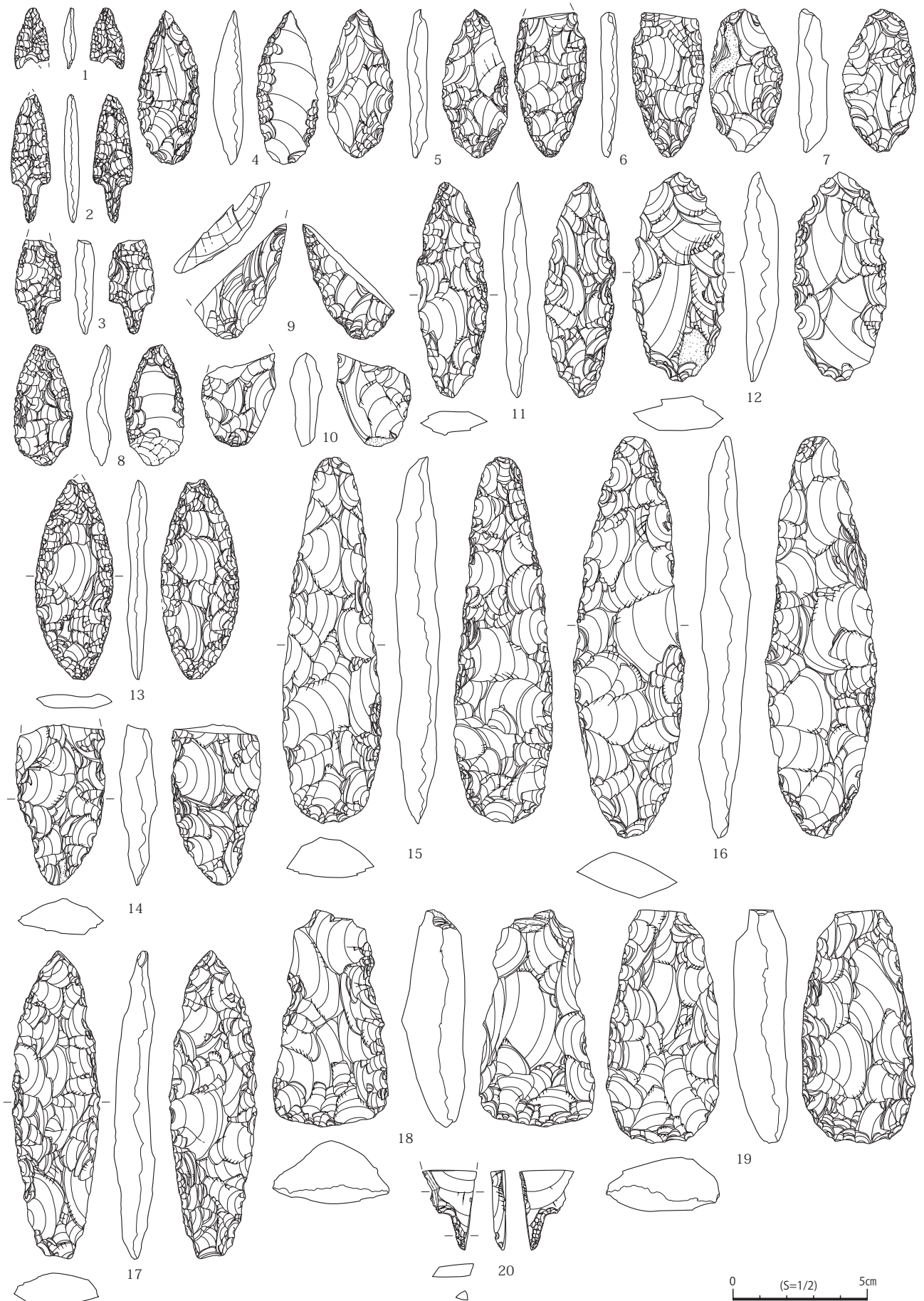


图232 C区遺構外出土遺物(2)



图233 C区遺構外出土遺物(3)



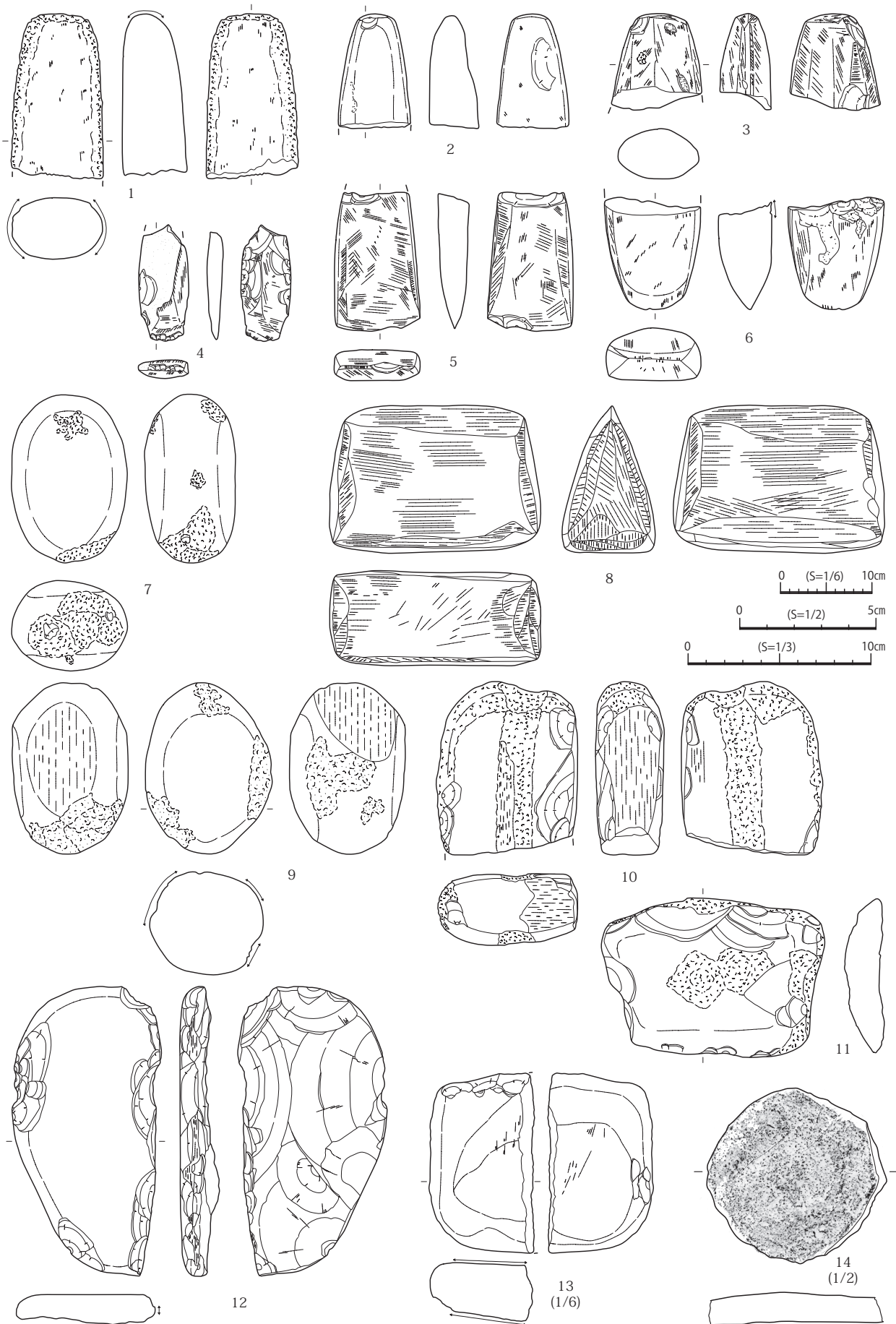


图234 C区遺構外出土遺物(4)





## 第4章 放射性炭素年代測定



A区北側(南東から)

## 第4章 放射性炭素年代測定

### 山田(2)遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

山田(2)遺跡は、青森県蓬田村大字瀬辺地字山田地内に所在する。測定対象試料は、ASI-20炉出土木炭 (08YAMA2-3 : IAAA-82241)、ASI-23出土木炭 (08YAMA2-6 : IAAA-90474)、ASK-222出土木炭 (08YAMA2-11 : IAAA-90479)、B区西捨て場出土木炭 (08YAMA2-12 : IAAA-90480、08YAMA2-13 : IAAA-90481)、ASK-293出土炭化物 (09yamada2-1 : IAAA-92258)、BSK-138出土木炭 (09yamada2-2 : IAAA-92259)、BSK-142出土木炭 (09yamada2-3 : IAAA-92260)、沢支流1出土木炭 (09yamada2-4 : IAAA-92261)、BSK-172出土木炭 (09yamada2-5 : IAAA-92262)、BSI-21炉1出土木炭 (09yamada2-6 : IAAA-92263)、CSI-2炉出土木炭 (09yamada2-7 : IAAA-92264)、合計12点である。

#### 2 測定の意義 (略)

#### 3 化学処理工程 (略)

#### 4 測定方法 (略)

#### 5 算出方法 (略)

#### 6 測定結果

(2次調査分)  $^{14}\text{C}$ 年代は、08YAMA2-3が $4070 \pm 30\text{yrBP}$ 、08YAMA2-6が $4550 \pm 30\text{yrBP}$ 、08YAMA2-11が $4590 \pm 30\text{yrBP}$ 、08YAMA2-12が $4870 \pm 30\text{yrBP}$ 、08YAMA2-13が $6110 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) から判断すれば、新しいもの (08YAMA2-3) が縄文時代中期末、それ以外の試料が縄文時代中期前葉に相当する年代である。この結果は、08YAMA2-3が縄文時代中期末、その他が縄文時代前期末～中期初頭とされる調査所見に整合的である。08YAMA2-13はこれらよりも古い年代となった。炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

(3次調査分)  $^{14}\text{C}$ 年代は、09yamada2-1が $4750 \pm 20\text{yrBP}$ 、09yamada2-2が $4670 \pm 20\text{yrBP}$ 、09yamada2-3が $4680 \pm 20\text{yrBP}$ 、09yamada2-4が $4660 \pm 20\text{yrBP}$ 、09yamada2-5が $4730 \pm 20\text{yrBP}$ 、09yamada2-6が $4210 \pm 20\text{yrBP}$ 、09yamada2-7が $3930 \pm 20\text{yrBP}$ である。09yamada2-1～5は縄文時代前期末から中期初頭頃、09yamada2-6は縄文時代中期後半、09yamada2-7は縄文時代中期末頃の年代値となっている。炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

#### 参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2) , 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A) , 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A) , 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



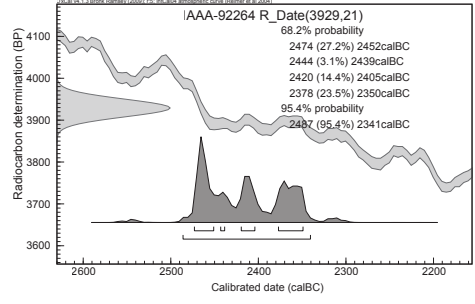
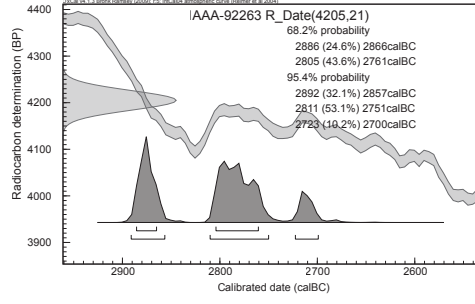
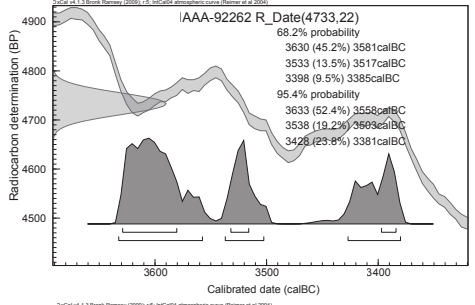
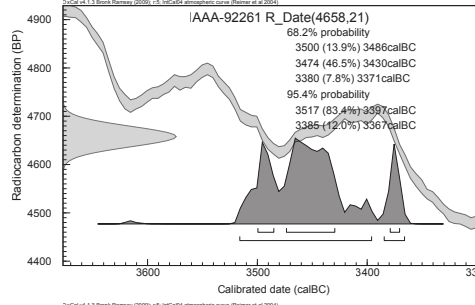
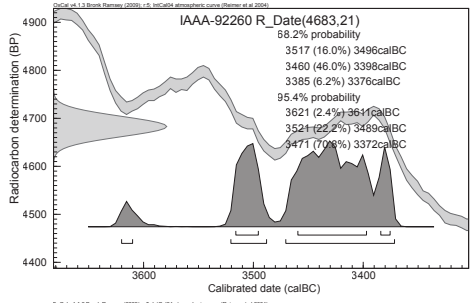
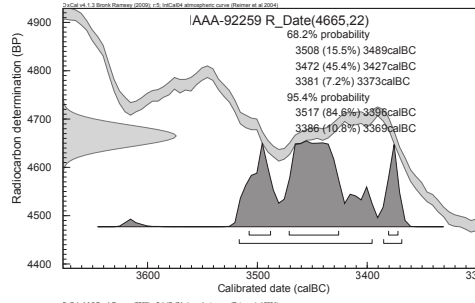
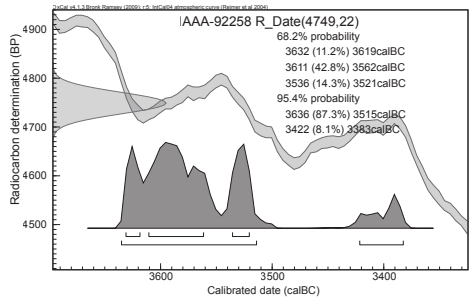
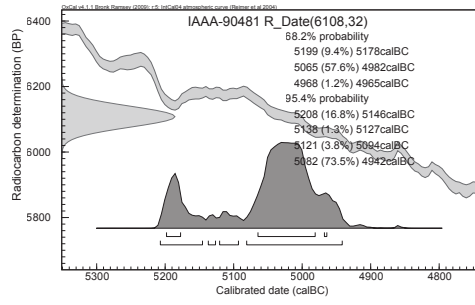
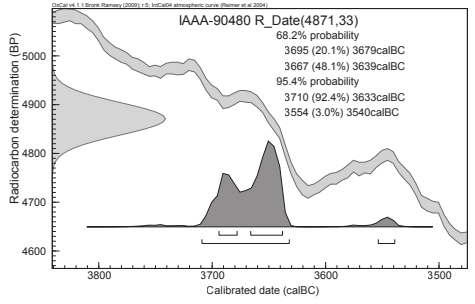
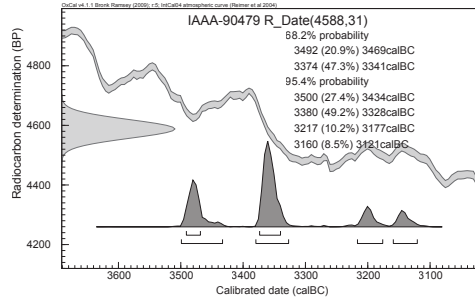
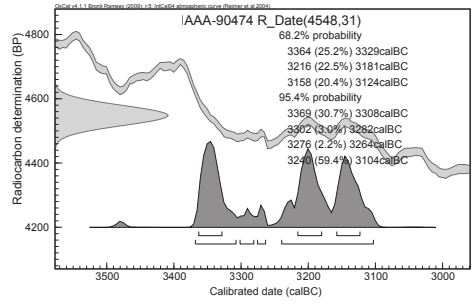
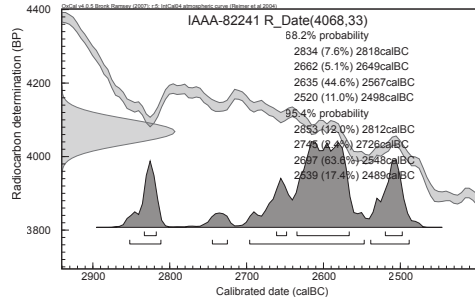
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり			
						Libby Age (yrBP)		pMC (%)	
IAAA-82241	08YAMA2-3	ASI-20 炉覆土	木炭	AAA	-27.16 ± 0.61	4,070 ± 30	60.26 ± 0.25		
IAAA-90474	08YAMA2-6	ASI-23 覆土	木炭	AAA	-25.54 ± 0.25	4,550 ± 30	56.77 ± 0.22		
IAAA-90479	08YAMA2-11	ASK-222 覆土	木炭	AAA	-25.57 ± 0.24	4,590 ± 30	56.48 ± 0.22		
IAAA-90480	08YAMA2-12	西捨て場 X V B-122 III下層	木炭	AAA	-29.15 ± 0.24	4,870 ± 30	54.53 ± 0.23		
IAAA-90481	08YAMA2-13	西捨て場 X V H-122 III層	木炭	AAA	-23.64 ± 0.19	6,110 ± 30	46.75 ± 0.19		
IAAA-92258	09yamada2-1	ASK-293 2層	炭化物	AAA	-18.29 ± 0.25	4,750 ± 20	55.36 ± 0.15		
IAAA-92259	09yamada2-2	BSK-138 底面	木炭	AAA	-24.43 ± 0.26	4,670 ± 20	55.94 ± 0.16		
IAAA-92260	09yamada2-3	BSK-142 4層	木炭	AAA	-22.44 ± 0.2	4,680 ± 20	55.81 ± 0.15		
IAAA-92261	09yamada2-4	沢支流 1 底面直上	木炭	AAA	-22.91 ± 0.27	4,660 ± 20	55.99 ± 0.15		
IAAA-92262	09yamada2-5	BSK-172 覆土	木炭	AAA	-20.81 ± 0.27	4,730 ± 20	55.47 ± 0.15		
IAAA-92263	09yamada2-6	BSI-21 炉1 覆土	木炭	AAA	-24.06 ± 0.26	4,210 ± 20	59.24 ± 0.16		
IAAA-92264	09yamada2-7	CSI-2 炉 2層	木炭	AAA	-24.66 ± 0.24	3,930 ± 20	61.31 ± 0.16		

[#2628] [#2991] [#3358]

測定番号	試料番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
		Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-82241	08YAMA2-3	4,100 ± 30	59.99 ± 0.2	4,068 ± 33	2834BC - 2818BC (7.6%) 2662BC - 2649BC (5.1%) 2635BC - 2567BC (44.6%) 2520BC - 2498BC (11.0%)	2853BC - 2812BC (12.0%) 2745BC - 2726BC (2.4%) 2697BC - 2548BC (63.6%) 2539BC - 2489BC (17.4%)
IAAA-90474	08YAMA2-6	4,560 ± 30	56.7 ± 0.2	4,548 ± 31	3364BC - 3329BC (25.2%) 3216BC - 3181BC (22.5%) 3158BC - 3124BC (20.4%)	3369BC - 3308BC (30.7%) 3302BC - 3282BC (3.0%) 3276BC - 3264BC (2.2%) 3240BC - 3104BC (59.4%)
IAAA-90479	08YAMA2-11	4,600 ± 30	56.41 ± 0.2	4,588 ± 31	3492BC - 3469BC (20.9%) 3374BC - 3341BC (47.3%)	3500BC - 3434BC (27.4%) 3380BC - 3328BC (49.2%) 3217BC - 3177BC (10.2%) 3160BC - 3121BC (8.5%)
IAAA-90480	08YAMA2-12	4,940 ± 30	54.07 ± 0.2	4,871 ± 33	3695BC - 3679BC (20.1%) 3667BC - 3639BC (48.1%)	3710BC - 3633BC (92.4%) 3554BC - 3540BC (3.0%)
IAAA-90481	08YAMA2-13	6,090 ± 30	46.88 ± 0.2	6,108 ± 32	5199BC - 5178BC (9.4%) 5065BC - 4982BC (57.6%) 4968BC - 4965BC (1.2%)	5208BC - 5146BC (16.8%) 5138BC - 5127BC (1.3%) 5121BC - 5094BC (3.8%) 5082BC - 4942BC (73.5%)
IAAA-92258	09yamada2-1	4,640 ± 20	56.13 ± 0.2	4,749 ± 22	3632BC - 3619BC (11.2%) 3611BC - 3562BC (42.8%) 3536BC - 3521BC (14.3%)	3636BC - 3515BC (87.3%) 3422BC - 3383BC (8.1%)
IAAA-92259	09yamada2-2	4,660 ± 20	56.01 ± 0.2	4,665 ± 22	3508BC - 3489BC (15.5%) 3472BC - 3427BC (45.4%) 3381BC - 3373BC (7.2%)	3517BC - 3396BC (84.6%) 3386BC - 3369BC (10.8%)
IAAA-92260	09yamada2-3	4,640 ± 20	56.11 ± 0.2	4,683 ± 21	3517BC - 3496BC (16.0%) 3460BC - 3398BC (46.0%) 3385BC - 3376BC (6.2%)	3621BC - 3611BC (2.4%) 3521BC - 3489BC (22.2%) 3471BC - 3372BC (70.8%)
IAAA-92261	09yamada2-4	4,620 ± 20	56.23 ± 0.2	4,658 ± 21	3500BC - 3486BC (13.9%) 3474BC - 3430BC (46.5%) 3380BC - 3371BC (7.8%)	3517BC - 3397BC (83.4%) 3385BC - 3367BC (12.0%)
IAAA-92262	09yamada2-5	4,670 ± 20	55.95 ± 0.2	4,733 ± 22	3630BC - 3581BC (45.2%) 3533BC - 3517BC (13.5%) 3398BC - 3385BC (9.5%)	3633BC - 3558BC (52.4%) 3538BC - 3503BC (19.2%) 3428BC - 3381BC (23.8%)
IAAA-92263	09yamada2-6	4,190 ± 20	59.36 ± 0.2	4,205 ± 21	2886BC - 2866BC (24.6%) 2805BC - 2761BC (43.6%)	2892BC - 2857BC (32.1%) 2811BC - 2751BC (53.1%) 2723BC - 2700BC (10.2%)
IAAA-92264	09yamada2-7	3,920 ± 20	61.36 ± 0.2	3,929 ± 21	2474BC - 2452BC (27.2%) 2444BC - 2439BC (3.1%) 2420BC - 2405BC (14.4%) 2378BC - 2350BC (23.5%)	2487BC - 2341BC (95.4%)

[参考値]









## 第5章 総括



B・C区(北東から)



## 第5章 総括

### 第1節 縄文時代の竪穴住居跡

平成19年度～21年度にかけて行われた本発掘調査の結果、竪穴住居跡は縄文時代73軒、平安時代4軒の総数77軒を検出した。本稿では縄文時代の竪穴住居跡について時期毎にまとめ、各種属性を分析する事とする。はじめに、1次調査で調査された竪穴住居跡の事実記載(青森県教委2009a)が、2次調査の結果、訂正されたものがある(青森県教委2010b)。これらのものから整理していきたい。

**07ASI-19**：本竪穴住居跡は地床炉と土器埋設炉が検出されたと報告されている。しかし、2次調査の結果、本住居跡の西側から新たにASI-18が検出され、07ASI-19の炉として報告されていた土器埋設炉は、炉の検出位置からASI-18の炉と判断された(青森県教委2010b)。本稿でもASI-18は土器埋設炉のある住居跡、07ASI-19は地床炉のみの住居跡として捉えるものとする。

**07ASI-33**：本竪穴住居跡の床面を2次調査時に再調査したところ、1次調査で炉として調査された範囲の下位から、堅く締まった火床面を検出した。調査時にはASI-2と新たな遺構名を付して調査を行ったが、本来は同一遺構と考えられる(青森県教委2010b)。そのため、本稿では07ASI-33を欠番号として扱う事とし、平面図などは2次調査のものを使用する事とする。

**07ASI-21**：本遺構は楕円形に巡っている溝と、その中に構築されているピット、溝に囲われた内側から検出された地床炉が報告されている。しかし、本遺構は2次調査の結果、近現代の攪乱と判断されたSX01に近接しており、かつ、図化されている溝とピットがSX01と形状が近似している。このことから、報告されている平面形は攪乱を図化した可能性が高いと考えており、本稿では本住居跡を地床炉しか検出されなかった遺構として分析するものとする。

上記の変更により各次調査で検出された竪穴住居跡数は、1次調査：21軒、2次調査：39軒、3次調査：13軒の総数73軒となる。このうち、BSI-8、BSI-10は中期後葉の竪穴住居跡であるが、中期前葉期のものと重複した分を住居数に含めていなかった。そのため、遺構番号を付した竪穴住居跡は37軒であるが、本稿ではこの重複分を含めて39軒として記載する。これらの竪穴住居跡を、炉体土器や床面出土遺物、床面直上出土遺物、遺構との重複関係からなどから、竪穴住居跡が機能していた時期ないしは埋没直後の時期を検討した。この結果、49軒の竪穴住居跡が、下記の各時期のものと考えられることができた。次に、時期を判断できた竪穴住居跡の属性を分析し、時期を判断できなかった24軒との比較を行い、構築時期を推測してみる。

#### 前期末葉期(下層d2式)9軒

BSI-6、BSI-11、BSI-13、BSI-17、BSI-15、BSI-16、ASI-24、BSI-19、BSI-23

#### 中期前葉期 21軒

上層 a 式：07ASI-16、ASI-5、ASI-10、BSI-1、BSI-2、BSI-3、BSI-5、BSI-9、BSI-12、BSI-14

上層 b 式：ASI-8、上層 c 式：ASI-13

上層 a～c 式：07ASI-23、07ASI-27、ASI-4、BSI-8、BSI-10、ASI-21、ASI-23、ASI-25、BSI-21

上層 a～c 式期とした竪穴住居跡は土器埋設炉の炉体土器や、床面直上出土遺物の口縁部が欠損していて、詳細な時期決定にかけるものを含めた。ただ、胎土や胴部文様等から上層 a 式段階に含められる可能性が高いと考えている。

#### 中期後葉～末葉 9軒



榎林式：BSI-04、BSI-08、BSI-10、BSI-22、最花式：ASI-20

大木10式：07ASI-7、07ASI-9、CSI-1、CSI-2

中期末葉～後期初頭 9軒

07ASI-26、07ASI-10、07ASI-12、07ASI-20、07ASI-28、ASI-1、ASI-11、ASI-14、ASI-15

後期後葉 1軒 BSI-20

○属性の変化

【平面形・規模】平面形は前期末葉～中期前葉の段階までは、長方形を基本とする平面形と円形を基本とする平面形が半々の割合であるが、中期後葉の段階では円形が主体を占めるようになる。この平面形の変化が住居規模にも反映されており、前期末葉～中期前葉までの段階では長軸の長さが6mを超える竪穴住居が全体の5割弱造られているが、中期後葉以降では6mを超える竪穴住居はほとんど造られず、6m以下のものが主体を占めるようになる。

【堆積土】前期末葉の段階では褐色土を主体とした土が堆積しているのが一般的である。中期前葉期の中型以下の竪穴住居跡にもこのような傾向が見られるが、長軸の長さが6mを超える住居跡では、褐色土は壁際に堆積している程度で、堆積土の大半は、中期後葉の遺物を含んだ黒色土がレンズ状に堆積している状況が見られる。BSI-21などはいい例で、黒色土と褐色土との層離面から中期後葉期の完形個体が出土しており、黒色土の中からは同時期の土器と共に多量の剥片石器が出土している。このことから、これらの住居跡は廃絶後ほとんど埋まりきらずに残っており、中期後葉期になり埋められた状況が推測される。また、前期末葉～中期前葉の住居跡とは異なり、中期後葉の段階になると覆土に黒色を基調とした土が堆積しているものが多くなる。このことから、調査区周辺にて黒色土が発達するのは中期後葉期周辺である可能性も考えられる。

【柱穴配置】前期末葉期～中期後葉期の竪穴住居跡で支柱穴配置を確認できた。基本的には軸線上で左右対称に4本ないしは6本の支柱穴が配置されている。なお、中期前葉期では、これに棟持柱と考えられる柱が付随する例がある(図237、238)。棟持柱は長軸規模が4mを超える住居跡から検出されており、検出位置は住居の中軸線上で、炉を挟むように2個配置されている例が多い。支柱穴配置と併せると六角形(亀甲形)の配置状況になるもの(BSI-12、ASI-21など)と支柱穴の中間に位置し長方形の配置状況になるものがある(BSI-5、07ASI-27など)。前期末葉期では規模の大小に関わらず棟持柱は検出されていない事から、中期前葉期になり上屋構造が変化した事が推測される。

【炉形態】前期末葉の段階では地床炉と土器埋設炉が使用されている。また、炉が構築されない住居跡も3割ほどある。中期前葉の段階でも前段階と変わらず、地床炉と土器埋設炉が使用されている。ただ、炉形態は変わらないものの、地床炉に掘り方が見られるようになる。一度床面を浅皿状に掘り込むものの、その掘り込んだ底面を使用せず、元に埋め戻した面を使用しているのである。

中期後葉～末葉の段階になると、石囲い炉や複式炉系列の炉が使用され始める。しかし、炉の平面形には榎林式期と大木10式期で違いが認められる。榎林式期では方形基調の石囲い炉であるが、大木10式の段階になると円形基調である。複式炉系列の炉は最花式のASI-20、大木10式並行期のCSI-2から検出された。炉体部は、ASI-20は石囲い炉、CSI-2は地床炉となっている。ASI-20の石囲い炉は方形で、古い段階の要素が認められる。前庭部はいずれも硬化している。中期末葉～後期初頭の段階になると炉の種類がさらに増え、斜位土器埋設炉、土器片敷き炉などが使用され始め、中には07ASI-26のように上原型複式炉と呼ばれるものに形態が似るものもある。07ASI-26は報告書中

属性		前期末葉 下層d 2式 (9軒)	中期前葉 上層a～c式 (21軒)	中期後葉～末葉 榎林式・最花式・大木 10式 (9軒)	中期末葉～後期 初頭 (9軒)	後期後葉 (1軒)	
配置状況		列状 (1列)	列状 (2列)	点在 (2軒隣接している 例が3例)	A区北側に集中	不明	
平面形	隅丸長方形	2軒	6軒		不明	円形	
	楕円形	2軒	4軒	1軒			
	円形	4軒	5軒	7軒 (77%)			
	隅丸方形	1軒	2軒				
	不明		4軒	1軒			
規模	1～3m	—	1軒	1軒	不明	上端規模 3.88 × 3.27 m	
	3～6m	5軒 (55%)	10軒 (52%)	7軒 (77%)			
	6m以上	3軒 (33%)	6軒 (31%)	—			
	重複等により不明	1軒	4軒	1軒			
堆積土		褐色土を主体とした 堆積層	1：褐色土を主体とした 堆積層 2：1次堆積土に褐色 土、覆土上位に黒色土	黒色土を主体とした堆 積層	不明	褐色土主 体	
主柱穴配置	柱穴なし	2軒	3軒	4軒	不明	不明	
	主柱配置有り	4軒 (左右対称： 4本主柱、6本主 柱)	8軒 (左右対称： 4本主柱、6本主 柱)	2軒 (左右対称： 4本主柱、6本主 柱)			
	不明	3軒	10軒	3軒			
炉形態	炉なし	3軒	1軒	-	不明	地床炉	
	地床炉	3軒	9軒	5軒			
	土器埋設炉	2軒	11軒				
	石囲い炉			2軒			
	複式炉系列の炉			2軒			
	土器埋設+土器片敷炉						1軒
	斜位土器埋設炉						5軒
	石囲い+土器片敷炉						1軒
	石囲い土器片敷き炉						1軒
	礫+土器片敷き炉						1軒
重複等により不明	2軒						
その他の施設			上層a式には棟持柱が 構築される	中軸線上の壁付近に硬 化範囲(BSI-4)		壁柱穴が 壁を半周	

では土器埋設炉と土器片敷き炉が、炉体土器に時期差があることから、重複しているものとして報告されている。しかし、土層図では重複が確認できない事と、使用されている土器が土器埋設炉の方が地文施文後に沈線施文されているもの、土器片敷き炉の方が地文縄文だけのものであるため、時期の違いを判断できない事から、本稿では土器埋設炉と土器片敷き炉がセットになったものと捉えることにする。この炉形態は土器埋設部+敷き石部+前庭部の組み合わせになる上原型複式炉と呼ばれるものに近似している。後期後葉期の竪穴住居跡は本調査区からは1軒しか検出されなかったが、炉形態は地床炉で、床面中央に造られている。

【その他の施設】前期末葉期のBSI-11では主柱穴の他に床面中央からピットを1基検出した。このピットの、開口部周縁には粘土が土手状に貼り付けられている。柱穴として機能していたのか住居内土坑として機能していたのかは不明である。中期後葉期のBSI-4では住居の中軸線上で北壁際の床面から硬化範囲を検出した。出入口の可能性も考えられる。後期後葉期のBSI-20では壁柱穴が壁を半周して構築されている。

#### ○遺構の再検討

時期不明の竪穴住居跡は以下の24軒である。

A・炉のない住居跡：BSI-7

B・地床炉のみの竪穴住居跡：07ASI-06、07ASI-08、07ASI-19、07ASI-21、07ASI-22、07ASI-25、ASI-29、ASI-6、ASI-9、ASI-12、ASI-16、ASI-22、ASI-26

C・礫+地床炉の竪穴住居跡：07ASI-17、07ASI-34、07ASI-36、ASI-2、ASI-3、ASI-27

D・土器埋設炉であるが使用された土器から時期の特定ができないもの：ASI-18

E・重複等により残存状況が悪いもの：07ASI-31、ASI-7、ASI-17

AのBSI-7はB区から検出されている。B区では中期末葉～後期初頭に帰属する住居跡は検出されていない事から、中期末葉以前の遺構と考えられる。また、本住居跡には黄褐色土を主体とした土が堆積している事と、平面形から前期末葉期～中期前葉期に帰属する可能性が考えられる。Cの礫+地床炉とした炉形態は、本遺跡で見られる中期末葉～後期初頭期の礫+土器片敷き炉(ASI-15)に炉形態が近似している事、一般的に中期末葉～後期初頭期の立石炉として報告されているものに形態が近似している事から当該期のものである可能性が高い。DのASI-18は、本遺跡で土器埋設炉を単体で使用しているのは前期末葉～中期前葉に限定される事から、当該期に帰属する可能性が高い。なお、A区から前期末葉期の竪穴住居跡が検出されていない事を鑑みると中期前葉期に帰属すると考えられる。

Bに分類した竪穴住居跡の11軒の内、07ASI-21、07ASI-22、07ASI-25、07ASI-29、ASI-6、ASI-16は地床炉のみの検出で掘り込み面を検出できなかった竪穴住居跡である。掘り込み面を検出できず、炉しか検出できなかった竪穴住居跡は中期末葉～後期初頭期に帰属させた8軒も同様である。このことから、当該期の竪穴住居跡は掘り込みが浅い特徴があると考えられる。地床炉のみの確認にとどまった先の住居跡は、掘り込み面の浅さ、周辺出土遺物、遺構検出面の高さなどから、中期末葉～後期初頭期に帰属する可能性が高い。残りの7軒については中期以降に構築されたものと考えられる。

#### ○まとめ

最終的な時期別遺構数は、前期末葉期(10軒)、中期前葉期(22軒)、中期後葉～末葉期(9軒)、中期末葉～後期初頭期(21軒)、後期後葉期(1軒)、中期以降(7軒)、不明(3軒)である。

調査区内で竪穴住居が構築され始めるのは前期末葉期(円筒下層d2式)からであり、当該期の竪穴住居は、平坦面の西側で、斜面の落ち際に沿って列状に構築されている。その後、中期前葉期(円筒上層a～c式)には竪穴住居の数が増加するが、この中でも、上層a式期に最も増加した可能性が考えられる。当該期の竪穴住居跡は、前段階と同様に平坦面の西側縁辺に沿って列状に造られるほか、新たに、平坦面の東側縁辺に沿って列状に造られており、2列の列状配置となる。いずれの列も平坦面の斜面際に沿って構築されており、立地条件に強い規制があった事が推察される。その後、円筒上層d～e式期には竪穴住居は構築されなくなるが、中期後葉の榎林式になると再度構築されはじめ、後期初頭にかけて断続的に構築されている。中期後葉～末葉にかけての住居跡は調査区内に点在しており、立地状況等に規制は見られないが、榎林式期ではBSI-8～BSI-10が、大木10式期ではASI-7～ASI-9、CSI-1～CSI-2がそれぞれ隣接して構築されている。その後、中期末葉～後期初頭期に竪穴住居跡の数は増加し、その数は21軒である。当該期の竪穴住居跡は丘陵北側の平坦面(A区先端部)に密集する傾向がある。このような傾向は本遺跡から2kmほど北に位置している坂元(2)遺跡(2011年3月刊行)でも認められる。これらのことから、竪穴住居跡の立地条件として、円筒式土器の段階では平坦面の斜面際が選定され、中期末葉～後期初頭では平坦面(特に丘陵北側)が選定されるという変化が看取される。なお、中期後葉期では立地条件に規制は認められないが、2軒隣接して検出されているものが多く、配置状況には規制があった事も推察される。(小山)



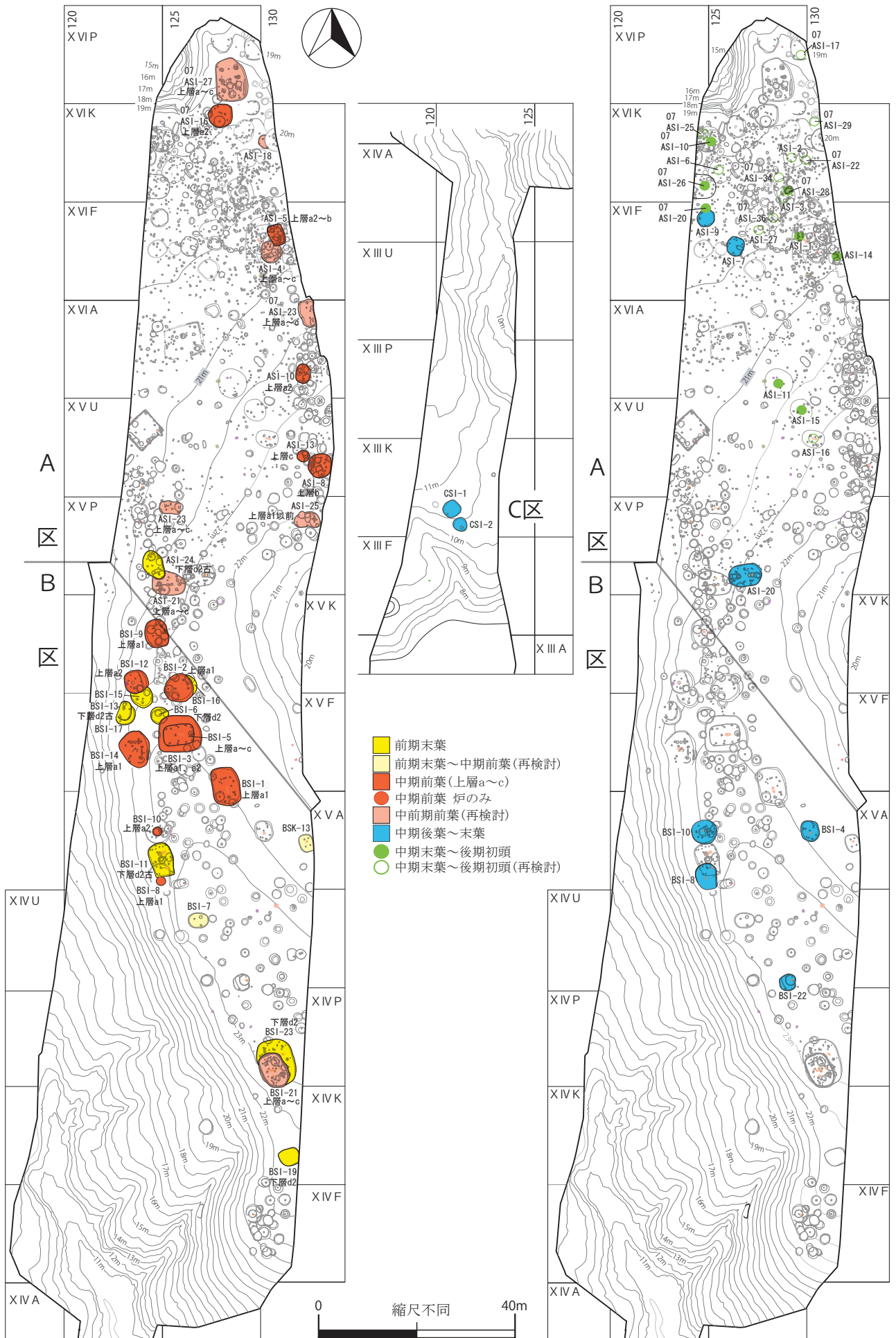
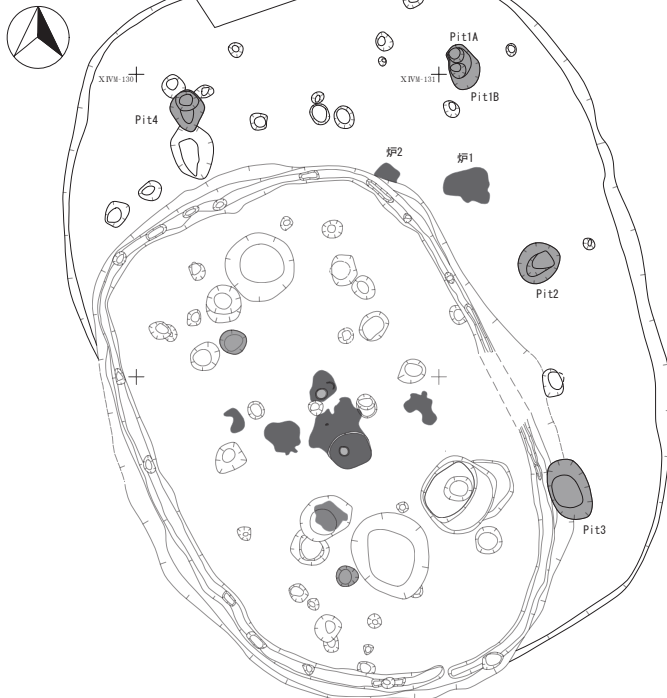
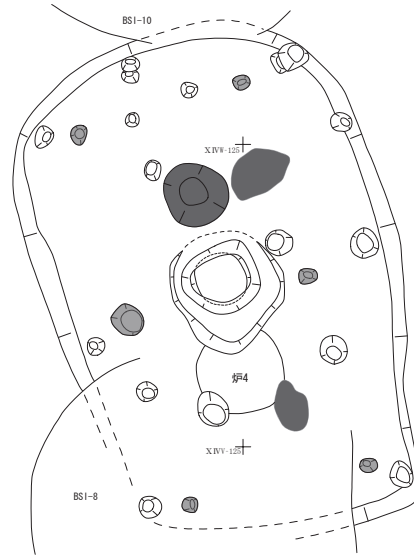


図235 竪穴住居跡遺構配置

前期末葉 下層 d2  
地床炉

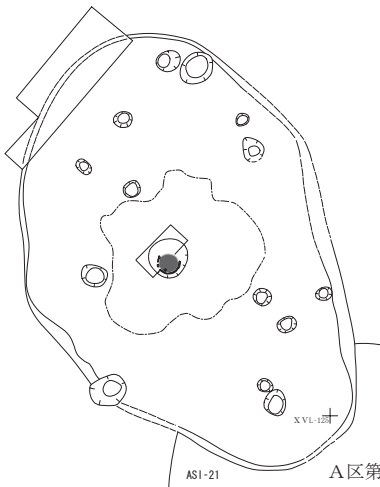


B区第23号竪穴住居跡 (BSI-23)

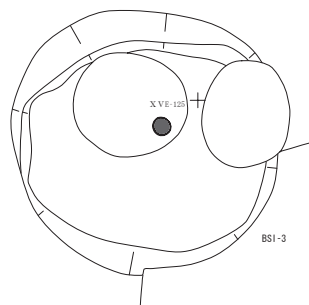


B区第11号竪穴住居跡 (BSI-11)

土器埋設炉



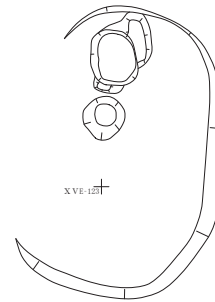
A区第24号竪穴住居跡 (ASI-24)



B区第6号竪穴住居跡 (BSI-6)

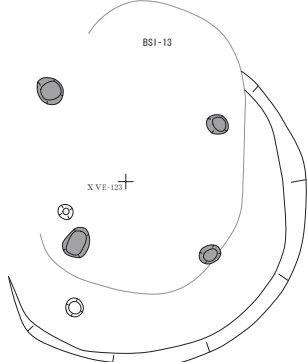


B区第19号竪穴住居跡 (BSI-19)

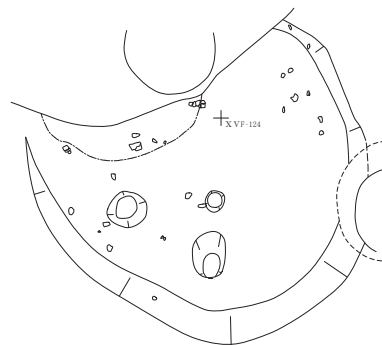


B区第13号竪穴住居跡 (BSI-13)

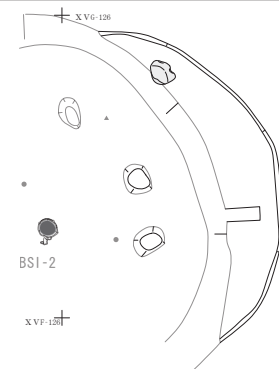
重複関係から当該期に帰属する  
可能性のある住居



B区第17号竪穴住居跡 (BSI-17)



B区第15号竪穴住居跡 (BSI-15)



B区第16号竪穴住居跡 (BSI-16)

■ 支柱穴 ■ 炉

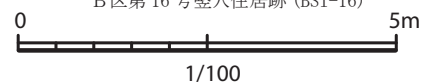


図236 竪穴住居跡集成(1)

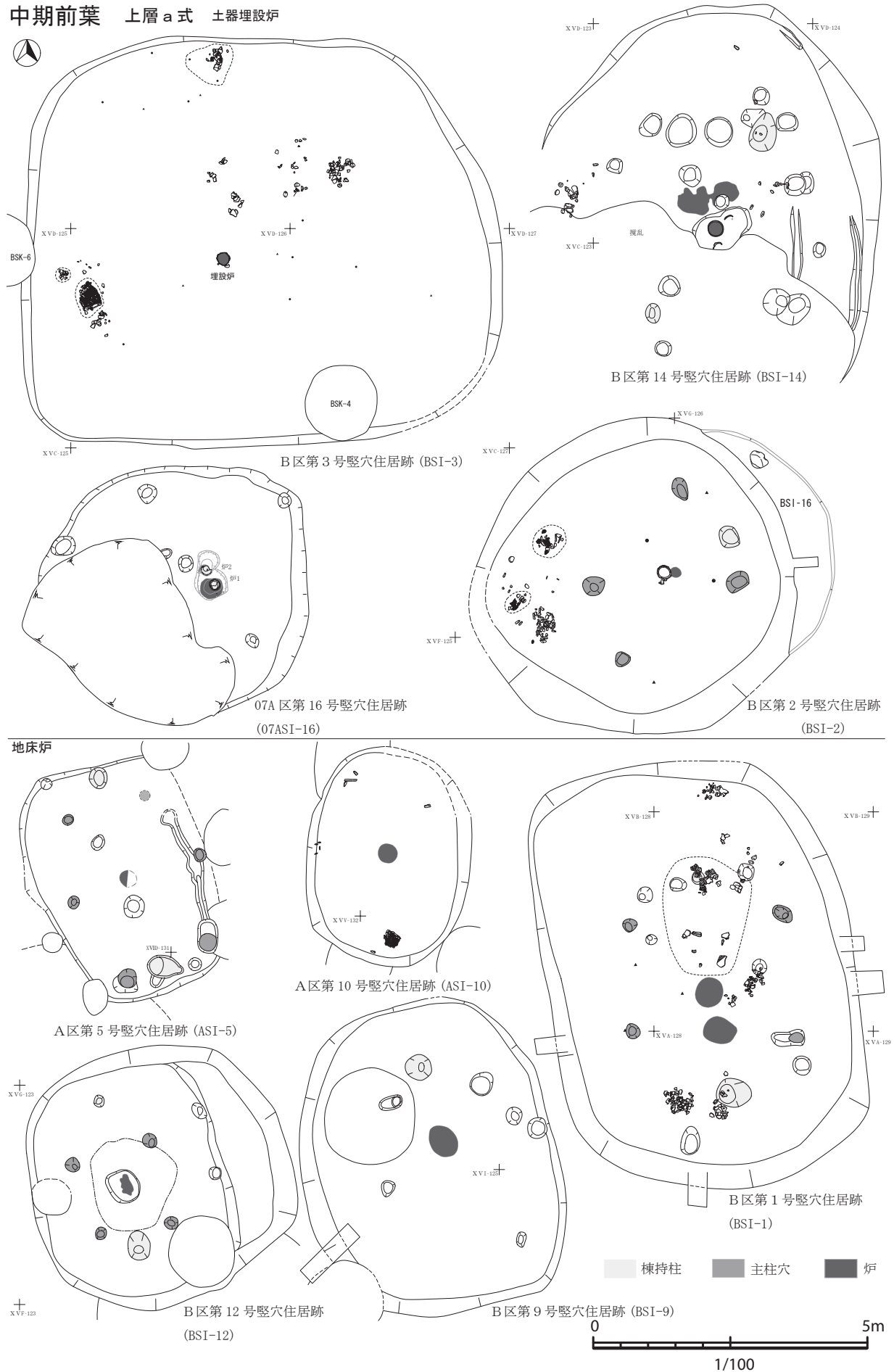
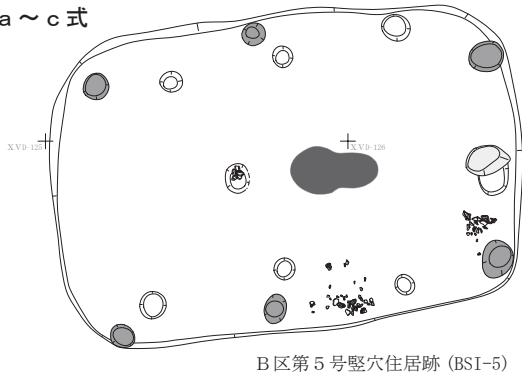


図237 竖穴住居跡集成(2)

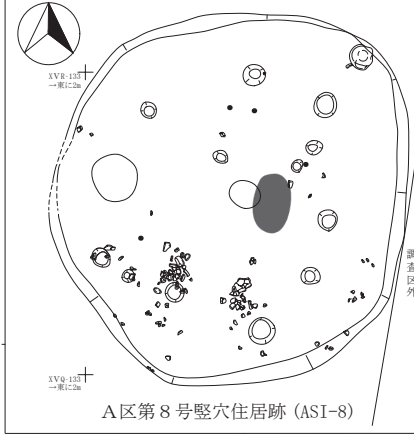


上層 a ~ c 式  
地床炉



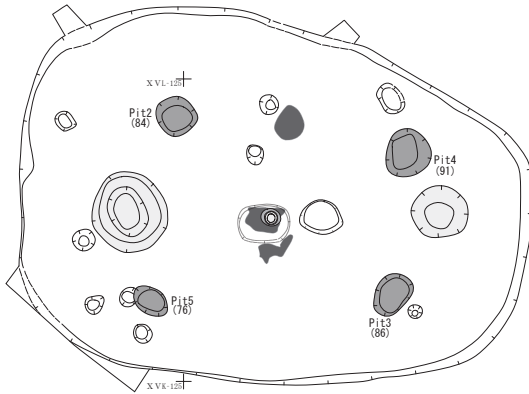
B区第5号竖穴住居跡 (BSI-5)

中期前葉 上層 b 式

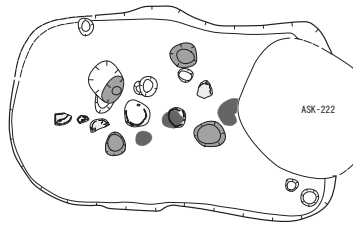


A区第8号竖穴住居跡 (ASI-8)

土器埋設炉

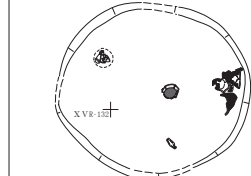


A区第21号竖穴住居跡 (ASI-21)



A区第23号竖穴住居跡 (ASI-23)

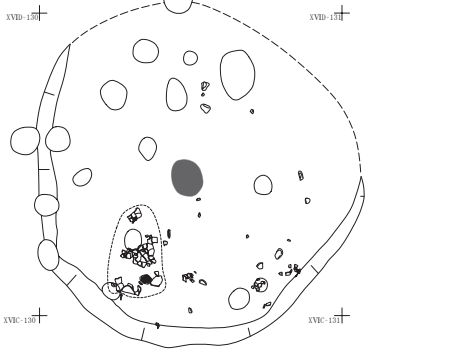
上層 c 式



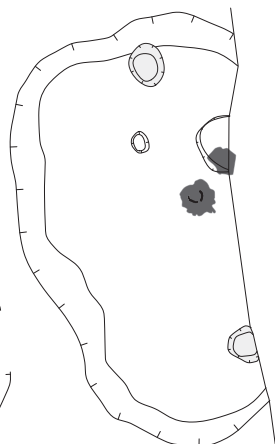
A区第13号竖穴住居跡 (ASI-13)



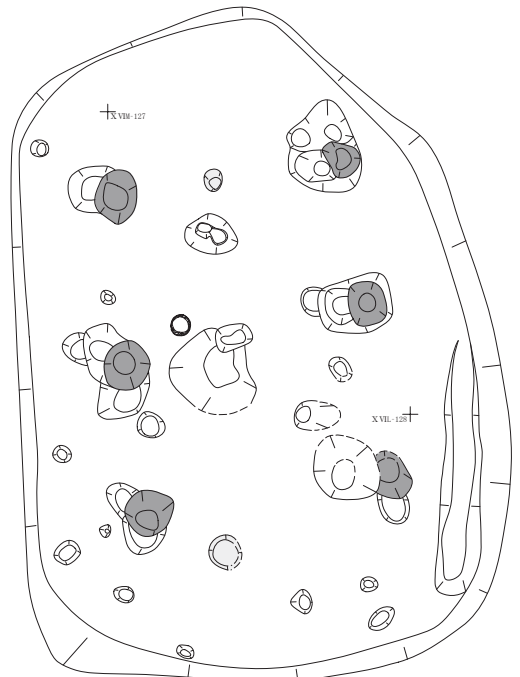
B区第21号竖穴住居跡 (BSI-21)  
地床炉



A区第4号竖穴住居跡 (ASI-4)

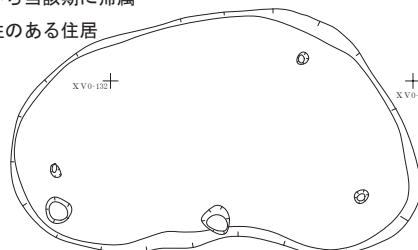


07A区第23号  
竖穴住居跡  
(07ASI-23)



A区07第27号竖穴住居跡 (07ASI-27)

重複関係から当該期に帰属  
する可能性のある住居

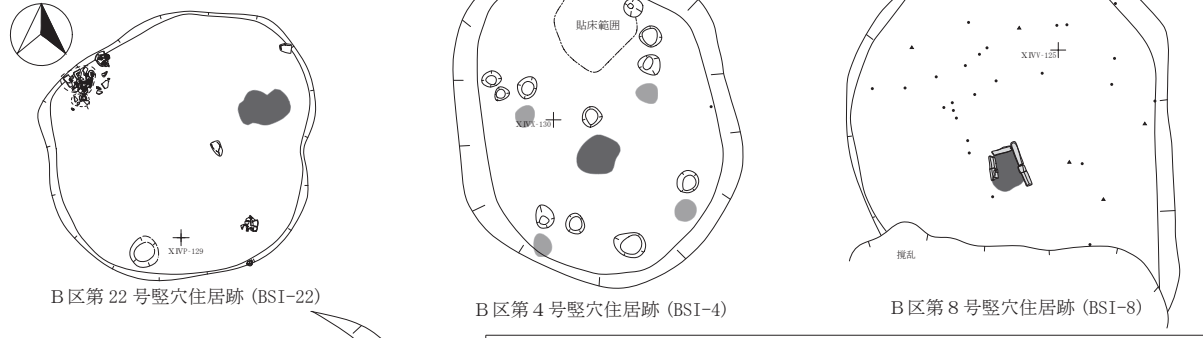


A区第25号竖穴住居跡 (ASI-25)



図238 竖穴住居跡集成(3)

中期後葉～末葉 榎林式



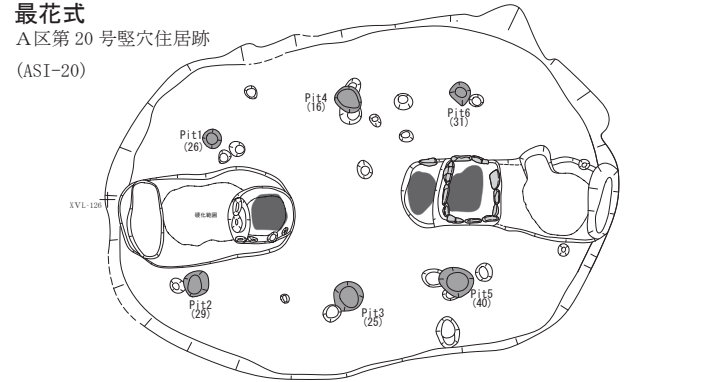
B区第22号竖穴住居跡 (BSI-22)

B区第4号竖穴住居跡 (BSI-4)

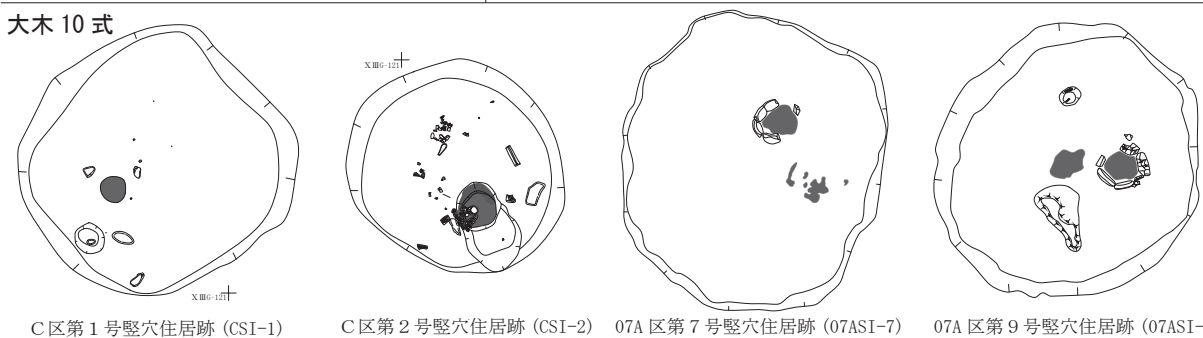
B区第8号竖穴住居跡 (BSI-8)



B区第10号竖穴住居跡 (BSI-10)



最花式  
A区第20号竖穴住居跡 (ASI-20)



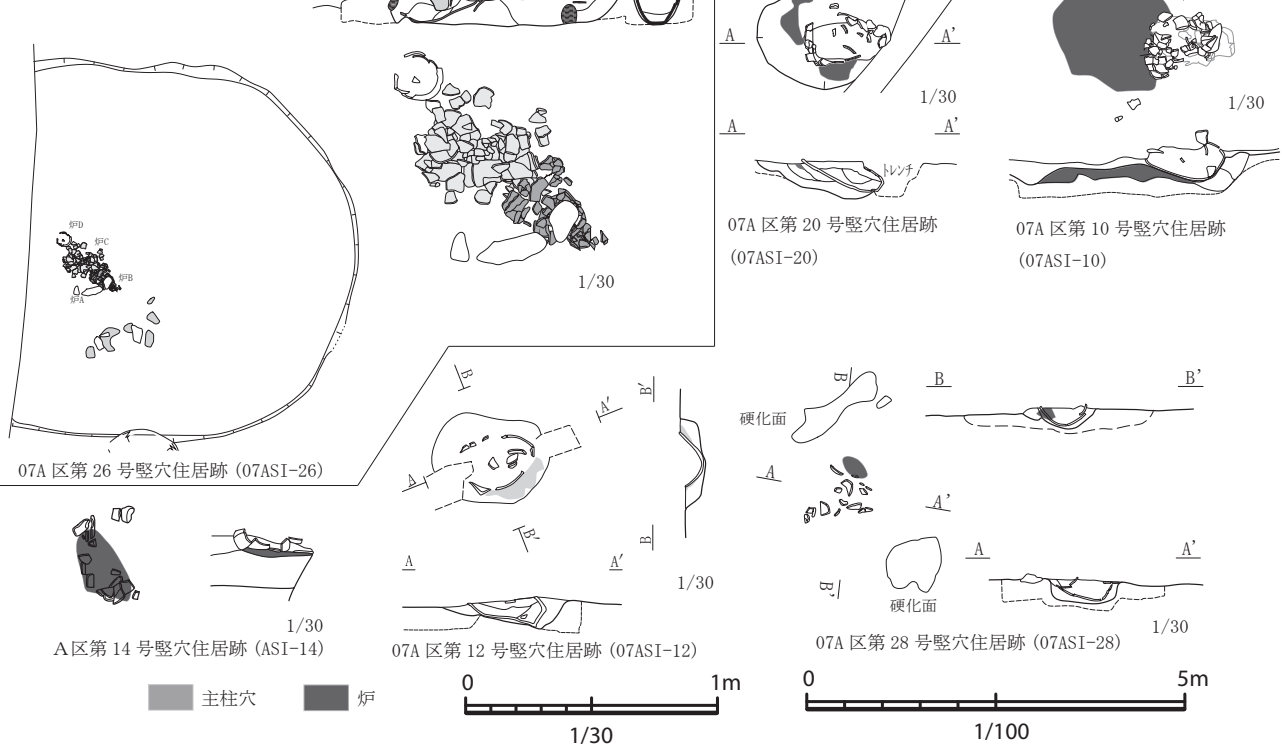
C区第1号竖穴住居跡 (CSI-1)

C区第2号竖穴住居跡 (CSI-2)

07A区第7号竖穴住居跡 (07ASI-7)

07A区第9号竖穴住居跡 (07ASI-9)

中期末葉～後期初頭



07A区第26号竖穴住居跡 (07ASI-26)

A区第14号竖穴住居跡 (ASI-14)

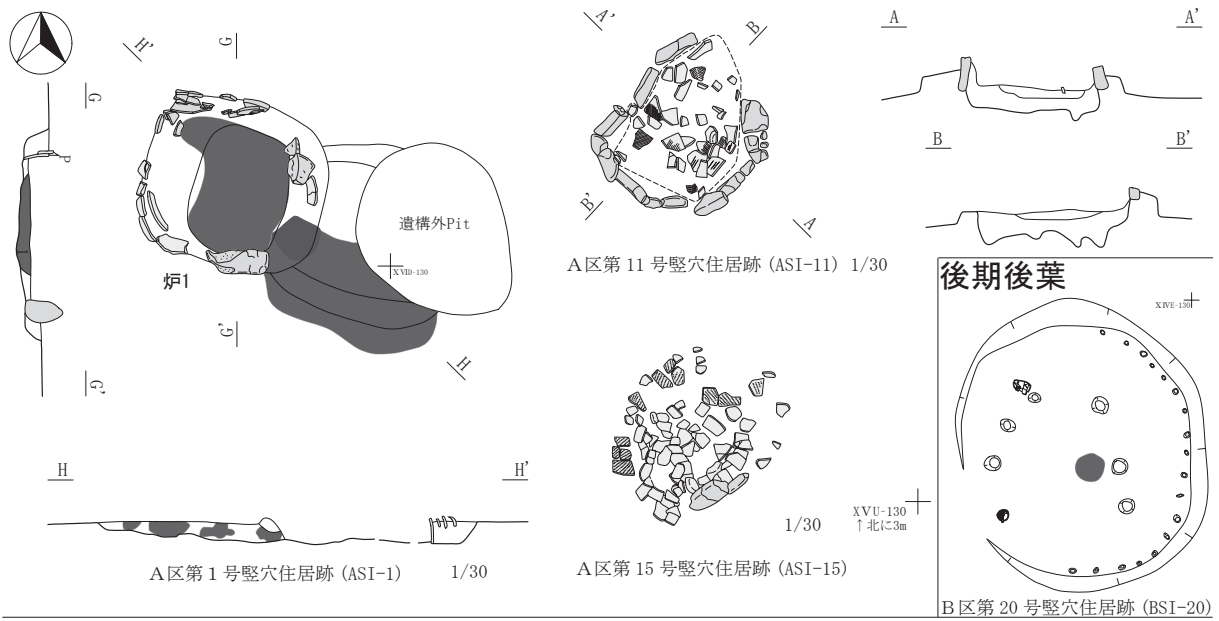
07A区第12号竖穴住居跡 (07ASI-12)

07A区第20号竖穴住居跡 (07ASI-20)

07A区第10号竖穴住居跡 (07ASI-10)

07A区第28号竖穴住居跡 (07ASI-28)

図239 竖穴住居跡集成(4)



再検討の結果  
各時期を推測した遺構

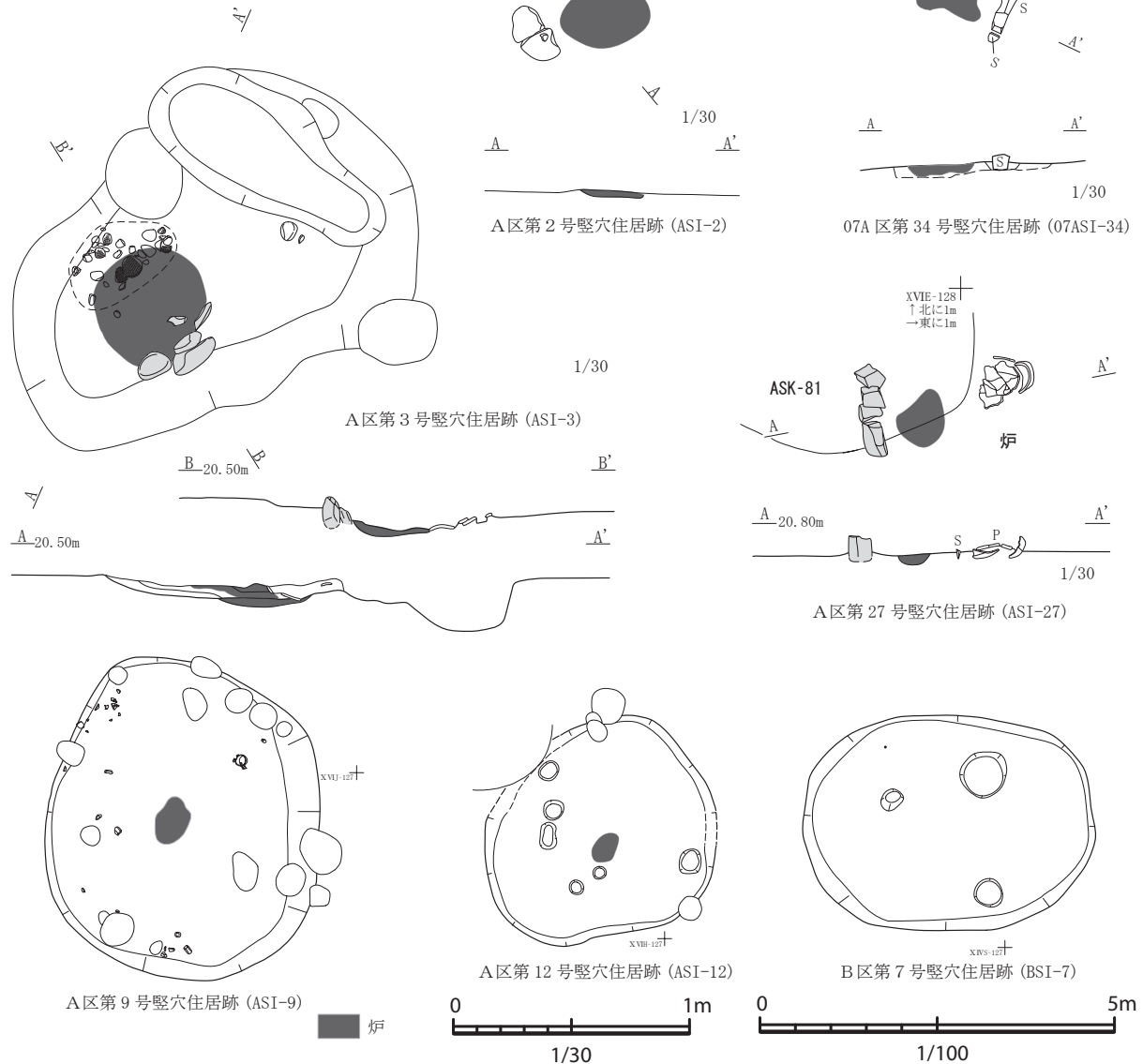


図240 竪穴住居跡集成(5)



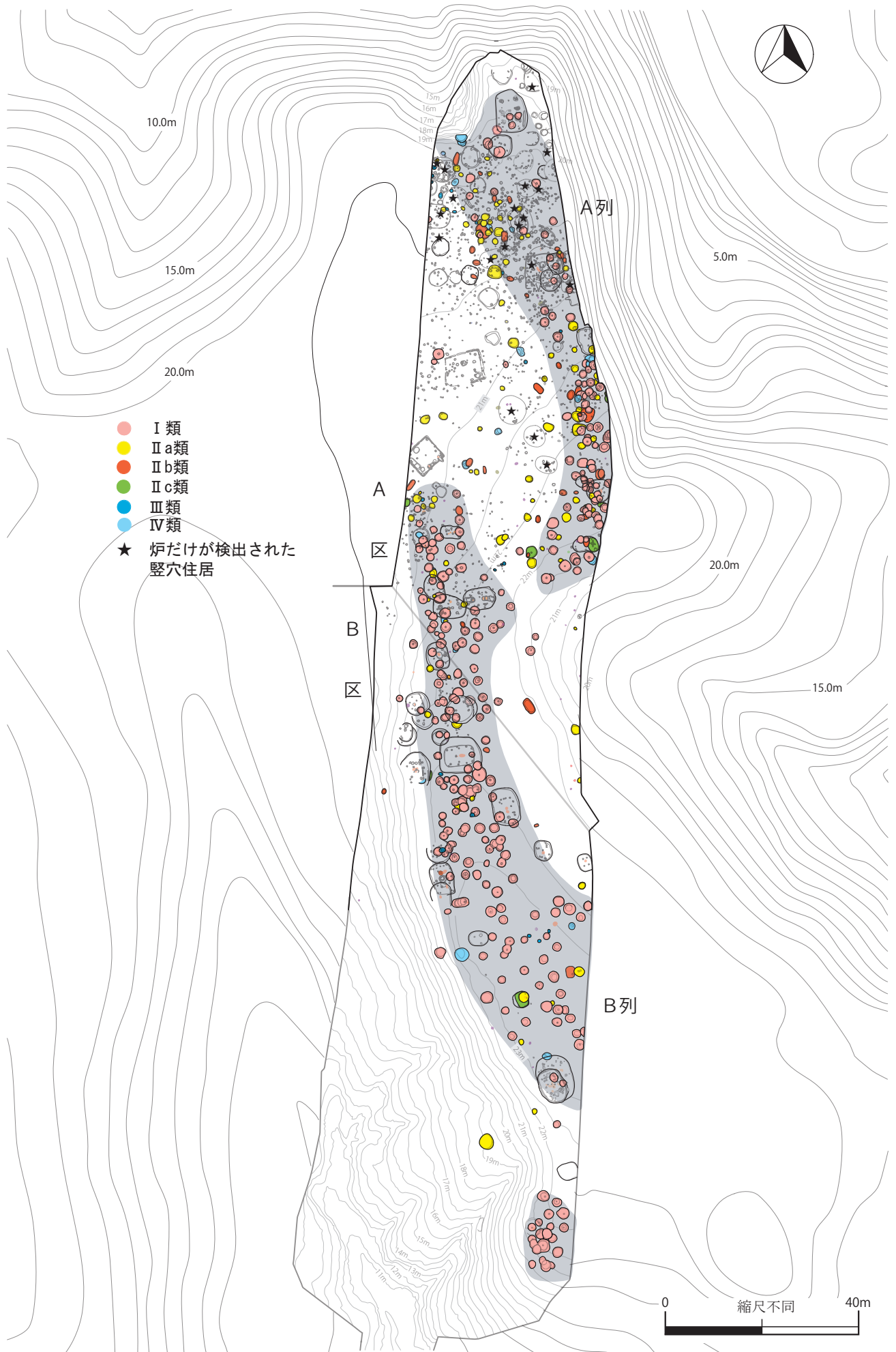


図241 周辺の地形と遺構配置

## 第2節 土坑

1次から3次調査の結果、総数502基の土坑を検出した。このうち、平安時代のものと考えられる土坑3基、土坑番号を付して調査を行ったものの竪穴住居跡としたBSK-13の1軒を除くと、498基が縄文時代の土坑と考えられる。本稿では、事実記載同様に断面形から下記の4類に分類し、検出数の多いⅠ類とⅡ類についてまとめるものとする。

Ⅰ類：断面形がフラスコ型のもの。(開口部が崩落しており、断面形が箱形のものでも、土層の堆積状況及び、底面施設の状況から本類に含めた土坑もある。)

Ⅱ類：断面形が浅箱形のもの。平面形の違いにより下記の3つに細分した。

- a 平面形が円形のもの。
- b 平面形が楕円形のもの。
- c 平面形が不整形のもの。

Ⅲ類：断面形が箱形で、平面形が円形のもの(いわゆるピット状になるもの)。

Ⅳ類：断面形が不整形のもの。

○Ⅰ類：288基が本類に分類された。検出した土坑数の6割を占めている。

【時期】堆積土中から前期後葉～後期初頭の遺物が出土している事から、当該期間に構築されたものと考えられる。この中でも、堆積土中から完形個体もしくは口縁部から胴部までである大型の破片が出土した土坑は57基あり、フラスコ状土坑の2割を占めている。これらの土坑から出土した遺物は円筒式土器が主体を占めており、中期後葉の遺物が出土したのはASK-69の1基だけである。土器型式で言えば円筒下層c式から上層d式までのものが出土しているが、中でも円筒下層d式～上層a式の土器が最も多い。これらの土坑は堆積状況の観察から、遺構廃棄後に時間をおかず埋め戻された可能性がある。そのため、堆積土から出土した遺物の年代は、遺構が廃棄された年代に極めて近いものと考えられ、フラスコ状土坑のうち、少なくともこれらの遺物が出土した2割の土坑については円筒式土器の段階に構築されたと考えられる。他の土坑に関しては遺物の出土が少なく時期を絞る事はできないが、配置状況や竪穴住居跡との重複関係などから円筒式土器の段階に構築されたものが主体を占める可能性を考えている。

【配置状況】図242で示したように列状の配置を2列確認できた。調査区の北東側に構築される列をA列、南西側に構築される列をB列として記載していく。A列は北東側へと落ちていく斜面際に構築されている。一方、B列も西側へ落ちていく斜面際及びB区の平坦面に構築されている。斜面際に構築されている土坑ほど重複が激しく、平坦面に構築されている土坑はあまり重複しない傾向がある。また、A列では平坦面内部にフラスコ状土坑がほとんど構築されておらず、A列とB列の間にはフラスコ状土坑が構築されていないエリアが看取できる(図242)。

次に時期を判断できた57基の土坑について配置状況を見ていく。本類が遺跡内に構築され始めるのは円筒下層c式からで、B列から検出されており、A列では検出されていない。その後、下層d1式～上層a式の段階になると、A・B列からそれぞれ検出され、上層d式になるとA列だけの検出となる。この事から、下層d1式の段階では既に平坦面の両側縁に土坑が構築されていた事が分かる。なお、B列内では一見すると斜面際に1列、平坦面側に逸れた位置で1列というように2～3単位ほどの列状配置が確認できる。確認した当初は、列の単位が時期毎の立地変遷を現している可能性を期待したが、